A MONTHLY REVIEW OF AMERICAN BOOKS

# 米書だより

リンカーン記念号
生誕150年

71

1959年　2月

## 「米書だより」発行によせて

およそ現在の情勢の下には孤立した文化というものはあり得ません。国と国との間に文化の交流がおこなわれ、お互に新たな発見と検討をすることが、さらに新しい文化を創造し、全人類が共通の目的に向つて進む基礎をつくるものです。翻訳という事業が外国文化の紹介、吸収に果している役割の大きなことは言うまでもありません。そして日本は世界で有数な翻訳の盛んな国であります。しかしながら、いずれの国にもありがちなことは、翻訳はある分野では非常に活潑でありながら別の分野では徴々としている場合があります。ある時には、ただ著名な作家の手になつたというだけの理由で、実はさほど重要でない書物が無批判に翻訳され、紹介されることもあります。また、たまたま過去においてその名前が一般の人々に知られていなかつたために、偉大な著述家が外国で看過されて来た事実もあります。

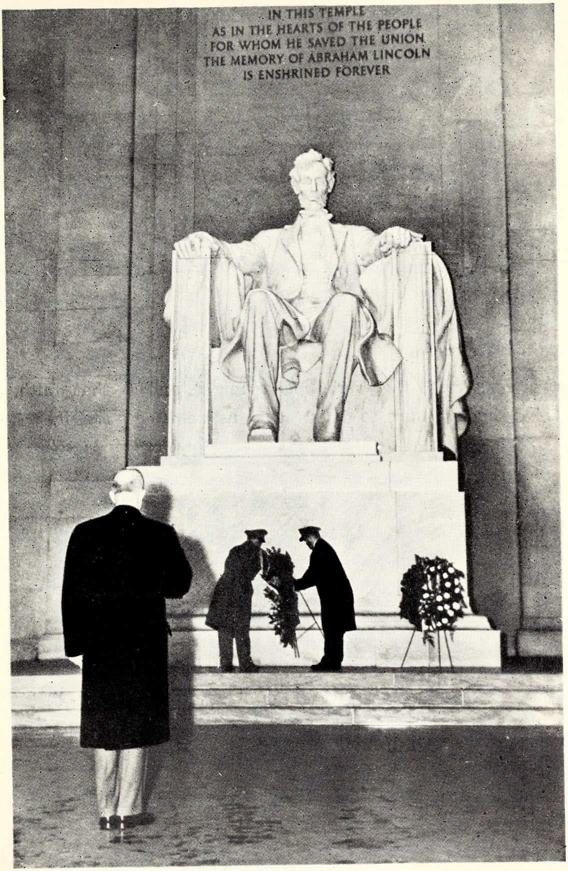
日本における米書の翻訳状況を見ると、なるほど重要な著書が数多く翻訳されておりますが、それのみをもつて米国文化の全貌が紹介されているとはいえないと考えられます。日本と米国とは世界の平和のために手をとり合つて進まなくてはなりません。そのためにこそお互の文化に対する深い理解と同情が必要であります。

「米書だより」は以上述べた観点から、日本の出版業者、書店のみならず、著述家、批評家、学者で海外の出版動向について関心をいだく方々に、米国で発行された書物のうち、とくに文芸、社会科学の分野において是非知つていただきたい書物を、米国の代表的な出版関係刊行物、書評誌より選択してその内容を紹介すべく編集されております。月に一回発行し、無料で配布します。

このささやかな冊子が機縁になつて米国の良書がさらに多く日本に紹介されるようになればしあわせであります。そして、本誌に対する御批評、御意見をおよせ下されば改善の参考にいたします。

*本誌に紹介する図書は必ずしも米国政府の見解あるいは方針を反映するものではありません。

**本誌の配布は一切無料です。本誌の誌代や購読申込みの手数料などを徴収することは、だれにも許されておりません。**




リンカーン大統領の霊に敬意を表するアイゼンハワー大統領

Let us have faith that right makes might, and in that faith, let us, to the end, dare to do our duty as we understand it.

*—Abraham Lincoln—*

## 『米書だより』第71号 目次

1959年2月

### リンカーン生誕150年記念号

**書籍紹介**



**記　事**

## 書 籍 紹 介

### Carl Sandburg ABRAHAM LINCOLN

カール・サンドバーグ著 **エイブラハム・リンカーン**（仮題）

N. Y., Harcourt, Brace. 1954. 762 pp. $7.50

詩人カール・サンドバーグはリンカーンがその生涯の大半を過したイリノイ州に少年時代を送つた。彼はリンカーンと同様に貧しく生い立ち、幼ない頃からすでに生活の苦しみを身近に体験していた。学校教育の機会に恵まれぬままに彼もまた大自然を師として、みずからの人生経験から大地に深く根差した智恵を学びとつた。心に悩みを抱いて故郷の大草原に立つたリンカーンの姿は果しない大草原の空を見上げるサンドバーグ自身の姿にそのまま通じるものであつた。



サンドバーグがこの同郷のリンカーンに不思議な愛着をおぼえ、長い年月を費してリンカーンの伝記を書き上げた情熱は決して理解し難いものではない。合衆国第16代大統領の栄誉を勝ち得たリンカーンはいわゆる幸運児ではなかつた。強い意志を持ち、激しい人類愛に燃えながらも人間的弱さに苦しむことが多かつたリンカーンにサンドバーグを始め数多くの作家が、歴史家が、学者が人間的共感を感じ、その伝記を書くことに大きな熱意を示して来たのである。

30余年をかけて2巻からなる **The Prairie Years** を書き上げたサンドバーグは約10年の間を置いて今度は4巻からなる **The War Years** を書き上げた。**The Prairie Years** はイリノイ州の田舎におけるリンカーンの青年時代を中心に独学で法律を学び立法院に進出する辺りまでを扱つている。次の **The War Years** は合衆国が分裂の危機に直面した南北戦争を中心に大統領の重職にあつて日夜心労するリンカーンのワシントンでの生活を描き出している。この全6巻からなるサンドバーグの力作はリンカーンの伝記の中で特に高く評価され、一般読者はもちろん、作家や学者にも大きな感銘を与えた。しかしその後さらに新しい伝記が書かれ、未発表の書簡や覚書が発表されたのを機会にサンドバーグは6巻の本髄を1巻にまとめると同時に新しく発見された事実を加えて、ここに紹介するまさにリンカーンの伝記決定版ともいうべきものを世に出したのである。

この本は 762 ページ、69 章からなる大冊であるが、終始一貫無駄なくまとめられており、著者サンドバーグの細かい心づかいがうかがわれて、さすがに詩人の筆に成るものといつた感慨を抱かせる。サンドバーグのねらいは一人の過去に生きた人間を過去のものとして描き出すのではなく、リンカーンが生きたそのままの生涯を再現することであり、読者の一人々々にあたかもその時代に生きているかのように感じさせることであつた。おそらく何人もサンドバーグ以上に深くリンカーンの内面の世界に入つて行くことは出来なかつたであろう。

リンカーンと同郷に育つた著者は生存中のリンカーンを記憶している人びとと交わりがあつた。彼はまたアメリカ各地を旅行し、リンカーンと親交のあつた人びとの血縁のものを探して歩いた。リンカーンに関する重要な記録は言うまでもなく、残されているあらゆる資料の調査に長い年月日を費した彼は同時にその頃の人びとが暗誦していた民謡や詩を始め諺、服装、娯楽に至るまで綿密に研究した。つまりリンカーンの人間を形成した当時の生活様式のすべてを探求し、詩人の想像力を通してその時代を再びよみがえらせようと努めたのである。

この伝記は第一章 "Wilderness Beginnings" に始まる。ニュー・イングランドのクエーカー教徒の血を引くリンカーン一族はやがて西部に移住し、ケンタッキー州に落着く。1809 年 2 月 12 日、開拓者の粗末な丸木小屋にトマス・リンカーン、ナンシー・ハンクスを父母として本書の主人公エイブラハムが誕生する。彼は早くから肉親の死を経験した。母親と、弟と姉が相ついで歿したのである。このためか彼はその生涯を通じて心の奥に死の影を祕めていたようである。彼の最初の恋人といわれるアン・ラトレッジも彼に見守られて若い生涯を閉じている。彼とアンとの関係には後に彼が結婚するメアリー・トッドに対する彼の態度と同様一種の女性恐怖症とでも呼ぶべきものが見られる。だがこの反面ニュー・セイラム時代の青年リンカーンは 6 尺 4 寸の長身で、巨体のレスラーを投げとばしたり、ウィスキーの大樽を床から持ち上げたまま樽口から飲んで賭けに勝つたりしている。イリノイ州では彼は小さな店に働いたり、郵便局の仕事をしたり、測量師となつたり、安定しない生活を送つていたが、独学で法律を勉強し、やがて立法院議員に当選した。彼の運命はこの時すでに決つていたといえよう。しかし彼の歩いた道は決して安易なものではなかつた。何回かの失敗もあれば敗北もあつたのである。サンドバーグは、リンカーンがまだ 30 歳にもならぬ頃から 'old

man'と呼ばれていたと書いている。深いしわを刻んだ彼の顔と人一倍長身で痩せた体には、雨にたたかれ風に吹き荒らされながらも屈することのなかつた槲の古木といつた風情があつたという。彼に始めて会う人は、ちようどこのような古木に対して感ずるなつかしさにも似た気持と、同時に畏敬の念を抱いたのである。

リンカーンは自分には大統領の重職につく資格がないと再三辞退しているが、一度共和党選出候補者の正式指名を受けると、勇気と自信をもつて相手に対している。奴隷問題が一段と険悪な様子を示した頃であり、リンカーンの演説も、つねにこの点に集中していた。創造主の下にあつてはすべての人間は平等であるという信条は、リンカーンがしばしば用いた'Family of Man'という言葉に象徴されていた。1861年、合衆国第16代の大統領に就任したリンカーンを待つていたのは、建国以来最大の危機であつた。彼の顔はますます深いしわを刻み、憂いを拭い去ることのできぬ日が多くなつていた。サンドバーグが引用している詩人ホイットマンの言葉は当時のリンカーンの姿をほうふつとさせる。リンカーンの表情には国家的憂慮だけではなく一個の人間としての内面的苦悩が現われていたようである。だが一面リンカーンはホワイト・ハウス始つて以来のユーモリストでもあつた。その頃の「アメリカ笑話本」の中には'Mr. Lincoln's latest jokes'というのが入つていた。また彼は自分が「自然の子供たち」と呼んでいた素朴な大衆の自然の智恵を尊敬し、夢知らせのようなことまで信じていた。不思議なことに彼は暗殺される数日前、殺された自分の遺骸がホワイト・ハウスに安置されている夢を見たのである。

確かに彼は理性家というよりはむしろ感情家であつたといえる。だが彼の強い人類愛はついに奴隷解放の偉業を成し遂げ、ひとり黒人の問題としてのみならず人間の自由の問題として広く世界に影響を与えたのである。この伝記の読者はリンカーンに人間的愛着をおぼえると同時に人間を超えた偉大さに打たれるであろう。サンドバーグが引用するトルストイはこう言つている。「リンカーンこそ唯一の真の巨人である... 縮図に描いたキリスト的存在である」と。だがリンカーンの友人はこう語つている。「わたしはお棺に納められた彼を見た。人間が稀にしか担うことを求められないような重荷を下ろした彼の顔は完全な満足と休息の表情を示していた。一人の疲れ果てた男が突然に解放された時の表情であつた」と。彼の遺体は故郷スプリングフィールドに運ばれ、数え切れぬ人びとが涙の中に見送つた。詩人サンドバー

グはこう結んでいる。

And the night came with great quiet.
And there was rest.
The prairie years, the war years, were over.

（一般）

## Paul M. Angle, ed: CREATED EQUAL? The Complete Lincoln-Douglas Debates of 1858

### ポール・アングル編　人間は平等か？ 1858年のリンカーン対ダグラスの討論（仮題）

Chicago, Ill., The University of Chicago Press. 1958. 422 pp. $7.50

1820年アメリカ合衆国が仏領ルイジアナを買取つた際に締結された有名なミズリー協定は、アメリカにおける奴隷問題を、最終的に解決した協約であるとも考えられていた。この協定は、アメリカを、北緯36度30分を境とする線で南北に二分し、この線の以北に位置する州はすべてこれを解放州、また以南の諸州をもつて奴隷州とする旨を宣言したものである。しかし、この後、米西戦争における勝利が、アメリカに広大な新領土をもたらし、大陸横断鉄道の敷設が、沿線諸地域の発達をうながすと、これら新開地に州政府を樹立する要求が高まつてきた。そしてここに再燃したのが、これらを解放州とするか奴隷州とするかの争いであつたのである。

以上のような情勢の下、イリノイ州選出の民主党上院議員スティーヴン・ダグラスはキャンザスおよびネブラスカ州の成立を認めるに際し、次のような提案を行つた。すなわち、これら二つの州において奴隷制度を許可するか否かは、その地域の住民の意思によつて決定させようというのである。彼は、これを人民主権の法理と名付けた。ここで問題となるのは、キャンザスおよびネブラスカの二州が、ミズリー協定のいわゆる36度30分の線より北寄りに位置し、したがつて、ダグラスの主張を認めることは、ミズリー協定を破棄するに等しい効果を持つことになるという事実である。今日、このダグラスの提案は、数年後に迫つた大統領選挙をひかえ、南部の民主党支持者にアピールするためになされたものであると説明されている。

このような提案は、もとより北部の保守党の好むところではなかつた。彼らは、キャンザス・ネブラスカ法の成立によつて、ミズリー協定成立以来、

まがりなりにも保たれてきた、北部と南部との均衡が破られることを恐れたのである。保守党のなかの急進派（＝奴隷制廃止論者）は、直ちに共和党を結成して、この法案をめぐる動きに対し、反対の狼煙をかかげたのであつた。しかし、彼らの反対運動も、1856年の大統領選挙では、十分の成果を収めることが出来なかつた。共和党は相当の票数を得ながらも、保守党不干渉派支持を得ることが出来なかつたために、民主党の代表者バッハマンの前に破れ去つたのである。けれどもわれわれはこの選挙において、奴隷問題が争点としてとりあげられたことが、国民のこの問題に対する関心をよびおこし、そしてこれが、1860 年の大統領選挙において、エイブラハム・リンカーンを当選させ、さらに南北戦争への糸口を切り開く原因となつたことを忘れてはならないであろう。

民主党のバッハマンの大統領就任後間もなく、合衆国最高裁判所は、ドレッド・スコット事件において、黒人は、法律上合衆国の市民となる権利を持たず、また、36 度 30 分以北の各州が、奴隷制度を排除することを規定したミズリー協定は、違憲であり、無効であるむねを判決した。この判決は、北部奴隷廃止論者の主張を真正面から否定したものに他ならない。この期におよび、リンカーンは、共和党員として、イリノイ州から連邦上院議員選挙に立候補し、民主党の雄、ダグラスと一戦を交えることを決意した。そしてこの二人は、三ヵ月の選挙運動期間を通じ、五回にわたつて重要な演説を行い、また七回にわたり公開討論会を開催して、イリノイ州民の奴隷問題に関する意見を問うたのである。

1858年6月16日、リンカーンは、スプリングフィールドにおいて、まず有名な「国家分裂」“House Divided”スピーチを行い、ダグラスに挑戦した。リンカーンは「国民は一体であらねばならぬというのに、なぜ政府は国内の一部において奴隷制を認め、他においてこれを否定しようとするのか？これこそアメリカを分裂に導くダグラスら民主党為政者の共同謀議である。」と主張したのである。これに対し、ダグラスは、7 月 9 日シカゴにおいてこれに答え、「ドレッド・スコット事件の判決は、人民主権の法理と矛盾するものではなく、またリンカーンの主張は、南北戦争の可能性を支持するものである。」と反駁した。この後、シカゴおよびスプリングフィールドにおいて反駁、再反駁をくり返した二人は、以後、まだ足をのばしたことのない七つの選挙区において、公開討論会を持つことに同意したのである。

オタワで開かれた、第一回討論において、ダグラスは、人民主権に両足

をふまえ、「リンカーンは、北部と南部との対立を助長し、かつ黒人と白人とを人種的に平等に取り扱うものである」とする当初の主張をくり返した。これに対しリンカーンは「民主党による共同謀議説」を強調し、かつ黒人と白人との基本的平等を主張したのである。この討論に、あまりにも多くの力を使いはたしたリンカーンは、これが終了したとき、人の手を借りなくては演壇を降りることが出来なかつたとさえいわれている。

第二回の討論は、フリーポートで行われた。ここでリンカーンの提示した問題に対する答は、ダグラスをして、非常に苦しい立場に追い込んだのである。「法律上合衆国領域テリトリーの住民は、その領域が合衆国の州の一つに編入される以前において、現在の合衆国人民の意思に反し、その領域から奴隷制度を排除することを得るものであろうか？」ダグラスの人民主権の法理によればこの問は、肯定に解するより他はない。しかし、キャンザス・ネブラスカなどの特殊な場合を除いて、一般的な事例についてこれを認めることは、彼の南部出身支持者が許すとは考えられないのである。そしてこのことは、1860年の大統領選挙に出馬を意図しているダグラスの立場を著しく困難なものにすることが予想されたのである。

この後、討論は、ジョンズボロー、チャールストン、ゲイルズバーグ、クインシー、アルトンと五回にわたり続けられた。これらはいずれも、時と場所とを変えたとはいうものの、二人の論じたところは、オタワおよびフリーポート討論の再述でありまた再反駁であつたに止まつたのである。

以上の演説と討論を通じて、ダグラスは、いわゆる人民主権の法理を主張することにより、彼が非常に実際的な政治家であることを立証した。このため、理想と信念とに燃えるリンカーンも、その選挙戦の後期においては、当初の彼の強い主張に、多少なりとも変更を加えねばならなかつたのである。

第一に、奴隷制廃止問題がある。当初リンカーンは、「国家分裂」スピーチにおいて、全国的な奴隷制廃止を主張した。しかし、この主張は、ダグラスの南北対立を助長するものであるとする反駁の前に次第に緩和され、ついには「この主張は、すでに奴隷制度が存在している南部諸州に対しては適用なく、単に36度30分以北の新開地に対してのみ適用さるべきものである。」という形で修正されるに至つた。

第二に、リンカーンが、はじめアメリカ独立宣言を引くことにより、黒人と白人との平等を主張したことについては前述した。しかし、第四回のチャールストン討論において彼は、この主張が、黒人の社会的、政治的平等を

意味するのではないことを明らかにした。「白人と黒人との間には顕著な身体的相異が存在し、それが故に、この二つの人種を社会的、政治的な素質からみて同じに生活させることはできない。この観点からするならば、白人は黒人にして優越しているといえるかもしれない。」しかし、奴隷制度を容認することは、「道徳的、社会的また政治的悪」であることには違いない。

リンカーンは、クインシーにおいて、さらに黒人問題に言及して次のように述べている。「共和党は、たとえ社会悪とはいえ、現存の奴隷州の秩序に干渉する意志はない。われわれは単にこの悪が、国内において、これ以上拡がることを防止するのみである。」換言すれば、ダグラスとの討論の後期におけるリンカーンの主張は、次第に修正され、単に、ドレッド・スコット事件以来の反動的な動きが、これ以上拡がることを防ぐことにその主眼を置いていたとも言うことが出来よう。

選挙の結果は、ダグラスの勝利に終つた。しかしこれとても、選挙人の票数において有利な立場を保ち得たにすぎぬのである。これを一般投票の数についてみるならば、リンカーンのほうがかえつてまさつていたと伝えられている。それ故この選挙は、いずれにとつても完全な勝利と呼ばれることは困難であろう。さらに、これをアメリカ史の観点からみるならば、イリノイの無名政治家リンカーンは、この選挙を通じて一躍全米にその名をとどろかす機会を得たのであり、ダグラスは人民主権の法理を擁護することにより南部有権者の支持を失つてしまつたのである。したがつて、後者が、上院当選のために払つた代価は、前者のそれに比べてあまりにも大きかつたとはいえないであろうか。

リンカーン・ダグラス討論の完全な記録は、さきに、1908年、スパークスの編集によつて、イリノイ州歴史図書館から出版された。ここに紹介した、ポール・アングルの手になる討論集の出版は、アメリカ史上二度目の権威ある出版ともいえよう。アングルは、かつてエイブラハム・リンカーン協会の幹事を務め、現在は、シカゴ歴史協会の評議員の一人であるが、1958年、リンカーン生誕百五十年を記念して、本書を編集出版した。

なお本書には、30ページにおよぶ歴史的背景の解説および、多くの有用な註釈が添えてある。（教養）

## Bruce Catton : THIS HALLOWED GROUND

### ブルース・キャットン著　**連邦軍がわから見た南北戦争**（仮題）

**N.Y., Doubleday. 1956. 437 pp. $5.95**

南北戦争の模様を描いた三部作の最後の一巻 **A Stillness at Appomattox** に 1954 年度のピュリツァー賞（歴史部門）と全米著作賞（非小説部門）の二つがあたえられると、その著者キャツトンは一躍有名になり、多くの先輩をだしぬいて南北戦争史の権威にまつりあげられてしまつた。キャットンはその後アメリカ史を中心とする雑誌 American Heritage の編集者にむかえられるという躍進ぶりを示し、著述のほうも、この本にみられるように、ますます盛んに精進をつづけている。目下、五年後に出版の予定となつている尨大な南北戦争史の準備に着手していると伝えられる。



この **This Hallowed Ground** の一巻も南北戦争史である。副題 "The Story of the Union Side of the Civil War" が明示しているとおり、これは北軍がわを主にした歴史であるが、南部がわのことも十分取扱われている。

キャットンの作品を作品と呼ぶのはすこし不当かもしれないが、彼が人気を集めたのは、その叙述が文学的にすぐれているからである。史実というものと文学性が、彼の作品においては完全に融合しており、全体の構成、緩急の節度、表現の的確性といつたものを批評家は口を揃えて絶讃しているありさまである。その筆法の特徴の一つは、戦争というものをさまざまな距離から眺めようとするところにある。例をあげると北部出身の一兵卒になりきつて、進軍や後退や戦闘の場面を、体験談のように物語つてゆく。将兵の服装、食事、彼らの日記、手紙にいたるまでこまごまと書き記されている。

つぎに作戦が論じられ、戦略が論じられるという叙述の方法がとられている。はじめは渾沌とした戦場の描写であつたのが、いつの間にやら戦争全体の経過へと発展し、戦争の原因のひとつひとつが解明されてゆく。リンカーンの奴隷解放布告と南北戦争の性格との関係について深味のある解釈を見せるキャットンの叙述のうまさも、大したものである。また構成が多少劇的になつてはいるものの、派手な大西洋沿岸添いの戦闘よりも、ミシシッピー流域の平原作戦を重視したり、グラント、シャーマン、リーといつた人たちの頭脳や人柄なども、しつかりした史実にもとずいて書かれていて、この本

が史書として申し分のないものだということを示している。

著者キャットンは 1899 年ミシガン州に生れた。第一次世界大戦中、オーバリン大学を退学して海軍に入つた。戦後はながらく新聞記者生活をおくつたが、1942 年以来は官吏をつとめるかたわら、南北戦争の勉強をはじめ、1952 年以後は著述に専念している。（一般） ——第 47 号、1957 年 2 月 ——

## Stefan Lorant: THE LIFE OF ABRAHAM LINCOLN

スティファン・ローラント著　**リンカーン伝**（仮題）

N.Y., The New American Library. A Signet Key Book. 1955. 256 pp. 50 ¢

リンカーンの伝記は数多い。そしてその一つ一つが書いた人の個性によつて彩られている。もちろんリンカーンは歴史上の人物で、それも、比較的近い時代に公的生涯を送つた政治家である以上、伝記を書くための資料には事欠かないわけである。したがつて、何人の伝記作家が彼の伝記を書かうとも、歴史的事実をはなれた空想的な物語を書くことは許されないはずである。沢山ある伝記の個性とは、各作家の事実に対する態度、つまり解釈の仕方の相違である。これによつて、各作家の画き出すリンカーンの人間像が異つて来るのである。作者の中には、世間の通説をそのまま写している人もあるし、また、主人公をあまりに理想化して、神格化した概念を造り上げてしまう人もある。スティファン・ローラントは、伝説的な要素を一切拭い去つて、広く集めた豊富な資料の巧みなモンタージュによつてリンカーンを一人の血の通つた人間として、読者の前に登場させる。

リンカーンの父から筆を起し、一般に、落着きのない下らない人間とされている大工であつたこの人が、実際は、立派に土地も所有し、一応の人物だつたとしている。1814 年度のある税関係の記録によれば、彼は、98 人の財産調べのリストの中で 15 番目の位置を占めていたという。すべてこの調子で著者はリンカーの本当の姿を捉えようとしているのである。

リンカーンの青年時代の生活についても著者は伝説的に信じられているエピソードに、史実に基く新しい光を投げかける。たとえば、恋愛についても、アン・ラトレッジが意中の人であつたというのが通説であつたが、彼女の急死後 1 年経つたばかりの時、リンカーンが求愛したメアリー・オゥエンズという女性の存在には誰もあまり注意していないという。そして、この求愛が失敗に終るまでの経過を述べ、その後 3 年にわたる苦しい恋愛時代を経

てメアリー・トッドと結婚する次第を語る。

すべて資料にもとずいて厳密な考証を加えながら著者は、リンカーンが父母のもとを離れ、さまざまな経験をした後、1837年スプリングフィールドに落着き、結婚し、弁護士を開業し、次第に政治界に身を投じ、ついに1861年第16代大統領に選ばれ、南北戦争の苦しい試練を経て、奴隷解放の大業を完成し、1865年4月狙撃されて息を引きとる迄の生涯を再現して見せる。

この本は資料を駆使し、正確な事実を伝える意図をもつて書かれたものであるが、決して、無味乾燥な報告書的作品ではない。著者はよく材料を消化し、見事な構成で筆を進めている。読者は、小説を読む気持で、興味と共感を覚えながら、ほとんど学校教育を受けたことのないリンカーンが、みずから学びつつ、教養を高め政治家として大成して行く経過を知るのである。そして、夫として、父として、リンカーンがどのような人間であつたかを改めて教えられる。この本によつて、リンカーンに対して、新しい親しみを感ずる人が多いであろう。なお写真、挿画が多数載せてあり、中には初めて発表されたものもある。ゲティスバーグ演説の自筆草稿、手紙などの他、大統領になるためスプリングフィールドを去る際に家具を売却した時の受取りなど興味深いものもある。年代順に並べられたリンカーンの肖像写真は貴重である。

著者にはこの他、リンカーンの写真をまとめた **Lincoln, A Picture Story of His Life** （本誌第28ページ参照）がある。（一般）

## Robert E. Sherwood: ABE LINCOLN IN ILLINOIS

**ロバート・シャーウッド著　イリノイ時代のリンカーン（仮題）**

N.Y., Scribner. 1937. 250 pp. $3.00

劇作家シャーウッドは処女作 **The Road to Rome** によつて批評家の注目を集め、**Idiot's Delight** でピューリツァー賞を獲得した。劇「イリノイ時代のリンカーン」は彼の成長を見守つていた読者の期待にそむかぬ成功を収めた。1938年10月3日にはワシントンの国立劇場で、同じく15日にはニューヨーク市のプリマス劇場でマックスウェル・アンダーソンやエルマー・ライスなどの劇作家が主宰する Playwright's Company によつて上演され、アメリカの観衆に深い感銘を与えた。この劇を実際に鑑賞した詩



人サンドバーグはこの本の序文を書いているが、その中で観衆が感銘を受けるのはこの劇がアメリカ人の夢にうつたえるものを持つているからであり、人間の自由の問題を提起しているからであると語つている。

この劇は3幕12場から成つている。作者シャーウッドは巻末の "The Substance of 'Abe Lincoln in Illinois,'" の中で述べているようにリンカーンに関する資料を綿密に読んでいる。劇作家がこのように事実の記録を根拠にして書き上げた作品はこれが始めてであると言われている。彼は12場の各々につきその歴史的裏付けを説明すると共にどの箇所でなぜ実際の記録から離れたかという理由を示している。作家が歴史から主題を選んで書く場合には学者風な記録を書くことは出来ず、せいぜい大衆を魅きつけられる程度の劇的効果を持たせて事実を翻訳する便宜を与えられた通訳といつた立場が許される。シェークスピアの描くクレオパトラやバナード・ショウのクレオパトラが実在したクレオパトラと如何に違つていようとも気にかけるものはいないが、リンカーンとなると真実に忠実であるということが義務となるばかりではなく、望ましいことになつてくる。真実を探求していたシャーウッドはリンカーンの生涯がそのまま一つの芸術作品であることを発見したのである。それは民主精神の成長を語る真実のアレゴリーであつた。しかも貧しい誕生に始まり暗殺に終る彼の生涯は精神的にも外部的にも闘いの多い、したがつて人一倍の意志の強さと努力を必要とした一生であつた。シャーウッドはリンカーンの人間性の形成過程を彼が成長した環境や彼自身の思考力に照らしてうきぼりにして見ようと試みたのである。

第一幕第一場では1830年頃の青年リンカーンが樵夫の服装で登場し、ニュー・セイラムに近い学校教師グレアムの丸木小屋で英語の勉強をしている。彼とグレアムの会話は非常に興味深いものである。教師と政治の何れを選ぶかという問いに対し、リンカーンは教師になると答えている。更に都会を好まない理由として大衆が恐ろしいと言つている。殺されはしないかと不安だというのである。そこで対話は死の問題に向けられる。リンカーンは幼ない自分が父親を手伝つて母親を葬つたこと、それ以来死の思いが頭をはなれないことなどを語る。グレアムは彼にキーツが死を歌つた詩を読ませ、彼は深く感動する。ここにキーツの詩を取り入れたのは作者の創作である。第2場にリンカーンの恋人が登場し、第3場では彼女の死に接したリンカーンの悲しみが痛々しいほどに描かれている。

第2幕は5場から成り、1840年から1842年までを扱つている。リンカー

ンはスプリングフィールドに事務所を持つ法律家として登場する。この幕で始めて黒人問題が論じられており、リンカーンの書簡から引用されている。第6場でメアリー・トッドとの婚約を破棄したリンカーンは政治的にも心を悩ます日を過しているが、第8場でめでたくメアリーと結婚することになる。

最後の第3幕は10数年を経た1858年に変る。場面はイリノイ州選出上院議員共和党候補者リンカーンと民主党候補者ダグラスとの立ち会い演説会に始まる。'A house divided against itself cannot stand' というリンカーンの有名な演説が聞かれる。第10場のリンカーンは3人の息子にかこまれ、末のタッドをひざにのせて話を聞かせている。そこへ彼を大統領に推薦しようとする人達が訪れ、妻のメアリーは非常に興奮している。第11場は大統領選挙の当日、刻々と得票数の報告が入るリンカーンの選挙事務所である。最後の第12場は1861年2月ワシントンに向けて故郷を離れるリンカーンの別離の言葉に結ばれている。スプリングフィールド停車場に立つたリンカーンの姿には喜びの色はなく、憂いのかげが濃かつた。「わたくしと同じ立場におられぬ方がたにはわたくしが今お別れにのぞんでどんなに悲しみの感情を抱いているかお分りいただけないでしょう」と始める彼の言葉は神の祝福を求める祈りに終る。イリノイ州での彼の生活に関係の深かつた32人の人物が登場する劇は見送りの人びとの歌声と汽笛のひびきの中にさまざまな思いをこめて静かに幕を下ろす。（一般）

## Paul M. Angle & Earl S. Miers, ed: THE LIVING LINCOLN

ポール・アングル<br>アール・マイアーズ共編　**在りし日のリンカーン**（仮題）

N.J., Rutgers University Press. 1955. 673 pp. $6.95

この本は一種の自叙伝である。シカゴ史学会の会長であり、リンカーン研究の一権威であるポール・アングルと南北戦争を扱つた著者で有名なアール・マイアーズが協力してリンカーンの書簡、演説、覚書、自作の詩などを時代順に巧みに編纂し、必要な箇所に解説を挿入したこの本はいわば一貫性を持つた物語であり、在りし日のリンカーンをほうふつとよみがえらせている。編纂者の序によると彼らがこの本を作成出来たのは1953年にロイ・P・バスラーがマリオン・D・プラットとロイド・A・ダンラップの助力を得て編纂し、出版した The Collected Works of Abraham Lincoln のおかげで

ある。この9巻からなる労作はイリノイ州スプリングフィールドにあるエイブラハム・リンカーン協会が数年をかけて企画したものであり、これによつて始めて完全にリンカーンの自叙伝的資料がまとめ上げられたのである。アングルとマイアーズはこれにもとずいて適当に選択し、一つの生涯の記録を一冊の本に織り込んだのである。

始めて政治家として立候補した時に略歴をたずねられたリンカーンは英国の詩人トマス・グレイの「挽歌」の一行 "The short and simple annals of the poor" に尽きると答えている。この気持は彼が大統領候補に指名された当時も変つていなかつたようである。新聞にのせる自叙伝を書くように求められた彼はやむを得ず2ページ半という短かい原稿を手渡した。だがこのように大げさな自叙伝を書くことを嫌つたリンカーンはそれにもまさる貴重な記録を残していたのである。つまり彼は郵便局長、測量師、立法院議員、弁護士、政治家と変遷する生活を通じて文書を残す機会を人一倍多く持つていたのである。しかも「文は人なり」という格言はそのままぴつたりとリンカーンにあてはまつたからである。

この本はイリノイ州の片田舎ニュー・セイラム時代に始まる 16 の時期に分けられ、それぞれの時期のリンカーンを最もよく現わすと同時に生涯を通じてのリンカーンの人となりを最もよく語つている書簡や演説の原稿が紹介されている。ニュ・ーセイラム時代の最初の演説は1832年23歳でイリノイ州立法院議員に立候補したリンカーンがサンガモ地区の人びとの支持を求めたものである。彼はこの年には落選しているが、たしかに後年の上院議員に立候補した当時の演説に比較すると説得力や気魄に乏しいようである。1858年にイリノイ州選出の共和党候補者リンカーンと民主党候補者ダグラスとの間に7回にわたつて行われた討論は黒人問題を廻つて激しく展開され、今日読んでも非常に興味深いものである。この選挙戦に敗れたリンカーンは全国的にその名を知られる結果となり、大統領選挙の地盤がこれによつて築かれることになつたのである。彼の演説は簡潔にして含蓄があり、てらいのない誠実さがにじみ出ている。演説に対する聴衆の反応が箇所々々に挿入されているので時折聴衆の笑声やヤジが聞えてくるような気分にさせられる。

リンカーン独特のユーモアは演説にもうかがえるが、彼の手紙は一層豊かに彼の気質を語つてくれる。その一つの例に彼が 29 歳の時に一人の婦人に宛てた手紙がある。彼はその手紙の中で自分がある知り合いの婦人の妹と無理やりに結婚させられそうになつた事情を説明している。彼はその相手の

女性がシェークスピアの劇中人物フォルスタッフと好一対の風采であると語つているが、その手紙全体が極めて丁寧な口調の中に真面目とも冗談ともつかぬ滑稽さをただよわせ、リンカーンの手紙の中では傑作の一つである。もちろん彼の性格は全体的に見て決して陽気とは言えなかつた。むしろ時折憂うつ症にかかり、多くの人びとが語つているようにその表情は悲しみをたたえているほうが多かつたようである。このような彼は心の悩みを打ち明けた手紙をしばしば友人に送つている。彼は感情的に激しい変化を経験することが多かつた人のようである。

演説や手紙とならんで読者の興味をそそるものにリンカーン自作の詩がある。彼はかなり文学青年的要素を持つており、故郷を歌つた詩などを友人と交換したりしているが選挙戦の最中にさえ政治を忘れて詩作を楽しむことがあつた。決して上手な詩とはいえないが素朴で、人間的なやさしさと愛情を感じさせるものである。その一つに宿屋の娘ローザに与えた次のような短詩がある。1858年の作である。

You are young, and I am older;
　　You are hopeful, I am not —
Enjoy life, ere it grows colder —
　　Pluck the roses ere they rot.

Teach your beau to heed the lay —
　　That sunshine soon is lost in shade —
That *now's* as good as any day —
　　To take thee, Rosa, ere she fade.

南北戦争中のリンカーンは心労の多い日を過していたが、彼が5人の息子を戦場に失なつたボストンの一婦人に書いた手紙でも分かるように見知らぬ人びとに対しても彼は深い心遣りを示すことが多かつた。ハーヴァードの入学試験に落ちた息子の友人にまで強い励ましの便りを送つている。

この本はリンカーンが暗殺された1865年4月14日附けの覚書で終つている。みずからの運命を予測することが出来なかつた彼は翌日の会見のメモを記している。この本を読みおえた読者は始めてリンカーンの全貌を生き生きと把えた心地がするであろう。非常に印象深い作品である。(一般)

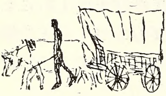
## Philip Van Doren Stern, ed: THE LIFE AND WRITING OF ABRAHAM LINCOLN

フィリップ・ヴァン・ドーレン・スターン編

**リンカーン言行録（仮題）**

**N. Y., Modern Library. 1940. 863pp. $2.45**

リンカーンの書いた公式文書、書簡、演説などは厖大な量にのぼる。秘書をしていたジョン・ニコレイとジョン・ヘイが編集して、1905年に刊行した 12 巻本の作品集が、リンカーンの言葉をもれなく集めようとする最初の試みであつたが、それ以後、新しく発見された資料も相当あり、これらもつぎつぎに発表されて来た。こうしていままでに集つたものを整理し、一般の読者がリンカーンの人となり、またその時代を知ることが出来るようなものを1冊にまとめ、伝記と年表を加えたのがこの本である。もちろん長いものは全文を収録する代りに抜萃を載せている。そして一つ一つの作品に簡単ながら要領を得た解説が添えてあるので、背景、前後関係がよく分り、本文の理解が深められる。



編者はフィリップ・ヴァン・ドーレン・スターンで、伝記は彼の筆による。序文はリンカーン時代の研究で有名なアラン・ネヴィンズが書いている。

その序文でネヴィンズは、リンカーンの言葉を読むことによつて、この偉大な政治家が活躍した時代に対する理解が深められるのは言うまでもないが、それ以上にどのような経過をたどつて彼があれ程の人物になつたか、その精神的成長を跡づけるという大きな興味があるといつている。時代そのものの研究には、リンカーンの言葉だけでなく、その他の資料が必要であるが、残した言葉を繰返し読むことによつて、直接リンカーンの心の奥を覗くことが出来るのであるというわけである。

ネヴィンズはリンカーンの精神的、人間的成長を次の3つの段階に分けている。青年時代から 40 才近くなるまでは、あらゆるものから何かを学んだ形成の時期であつたが、すでに偉大な人格の片鱗がうかがえる。40才になる頃、歴史の上では、テキサスの併合問題が盛んに論議されていた頃には、知的完成期に入つていた。1845年にこの問題について書いた言葉は、飾り気のない淡々とした行文で、強い信念をゆるぎない論理で展開している。これはリンカーンが知性的に大きな進歩をなしとげようとしていたことを示すも

のである。第3の時期は、大統領に就任し、南北戦争という大きな試練の中で、深い精神的洞察力を身につけて来た時代である。1861年の大統領就任演説にその萌芽が見られる。そして、この時期の最高の言葉は再選された時の大統領就任演説である。この演説で、リンカーンはたんに偉大な精神的、知的指導者であつたばかりでなく、本当の意味で社会の木鐸であつたことを知るのである。リンカーンはこの演説で合衆国の過去と未来に対する宗教的考察を示したのであつた。序文に説かれている考え方は、リンカーンの政治家としての活動を歴史の上で理解するためにも有益であろう。

編者スターンのリンカーン伝は、読者がリンカーンの言葉をよりよく理解出来るように背景となる知識を提供するために書いたものであると断つているが、よくまとまつた伝記であり、これだけで一冊の書物となり得る程の内容と分量をもつている。まず、スターンはあまりに伝説化され、神格化されたリンカーンを生きた人間として再認識する一番よい方法は、リンカーンの残した言葉を味わつて読むことであると述べている。そうすることによつて、低い身分から大きな上昇線を描いて、悲劇的なクライマックスに至る波瀾に富んだ生涯を送つたリンカーンが、非常に人間的な人物であつたことが知られると言う。伝記に続く年表は、リンカーンの両親の結婚から、リンカーンの葬儀にいたるまでの詳細なものである。

この本は、リンカーンの言葉を通じて、その人となりを知る役に立つばかりでなくあらゆる立場の人びとによつて引用されることの多いリンカーンの言葉の参考書としても有益である。それには目次が詳しく、索引もついているので、参照するのが容易である。（一般）

### Herbert Mitgang, ed: LINCOLN AS THEY SAW HIM

ハーバート・ミットギャング編　**ジャーナリズムとリンカーン**（仮題）

N. Y., Rinehart. 1956. 519 pp. $ 6.00

この本は、リンカーンが田舎の一青年であつた日から、大統領となつて暗殺されるまで、新聞、雑誌などのジャーナリズムによつて、その活動がどのように評価され、批判されていたかを、当時の記事によつてありのままに示し、今までに書かれた評伝、伝記には見られないリンカーンの新しい姿を浮ぼりすることを目的としている。

序文でまず編者は、リンカーンの演説、文章はすでにまとめられてをり、

さらに、新しく見出されたものはその都度発表されているのであるが、一方、リンカーンに関して、当時の新聞雑誌に出た記事や論説などは、ヨーロッパのものはもとより、アメリカのものもまだ集められていないことを指摘している。もちろんリンカーンの伝記にはそういうものからの引用がないわけではないが、生のままの記事論説を集めるという試みはこの本が最初のものであると述べている。

若い時からリンカーンは新聞というものが論壇として重要な政治的意義をもつていることを認識していたので、何時も熱心な読者であつた。そればかりでなく、リンカーンが短い期間ではあつたが、一度自分の新聞をもつたことがある。これはリンカーンの生涯の知られざる一ページであろうと編者はいう。そして次のエピソードを紹介している。1859年5月リンカーンは、後にウィーン領事となつたキャニシアスという人と契約を結び、イリノイ・スターツ・アンジーガー紙を買取り、その新聞が共和党の政策に反する行為があつた場合、リンカーンが印刷機と活字を没収するという取決めをしたのであつた。しかし、大統領に就任する前に、この新聞をふたたびキャニシアスに譲渡してしまつた。

リンカーンの時代には、新聞は極めて党派的であつたというより、むしろ、政治家が自ら新聞の社主や主筆である場合が多かつた。このことに読者の注意を喚起して編者はリンカーンに対するジャーナリズムの研究は、ニューヨーク、イリノイ、ワシントンなど限られた地域の新聞を対象としたのでは不十分であるといつて、特に南部系諸新聞の調査研究の必要を力説している。

このような観点から、この本は、米国だけでなく、ヨーロッパにまで及ぶ広い範囲にわたつて、リンカーンに関する記事論説を集めてある。これらのものを読むと、リンカーンがどのような時の流れの中で実際に活躍していたかをまざまざと知らされる。ゲティスバーグ演説に対する批判、今日では政治的古典となつている第2回の大統領就任演説についての賛否両論など、現在の眼で当時のものを読むことは、歴史の流れを直接感ずることである。なお、リンカーンを扱つた当時の新聞雑誌の挿画、風刺漫画なども複刻してある。一つ一つの記事、論説には編者による短い解説がついている。

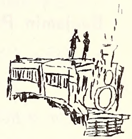
編者ハーバート・ミットギャングは、ニューヨーク・タイムズ紙の日曜版の主筆である。(一般、専門)

## Lord Charnwood: ABRAHAM LINCOLN

ロード・チャーンウッド著　**エイブラハム・リンカーン**（仮題）

N. Y., Pocket Books. 1957. 501 pp. 35¢

ロード・チャーンウッドによる **Abraham Lincoln** の初版は、1916 年に "The Makers of the Nineteenth Century Series" の一巻として出版された。その後、1939 年にポケット・ブック版で刊行され、以来 14 版を重ね、さらにカーディナル版ですでに 6 版になつている。



このチャーンウッドのリンカーン伝は、数あるリンカーンの評伝のうちの代表的な古典としてひろく知られている。英国人であるロード・チャーンウッドは、他のリンカーンの伝記作家たちよりもさらに自由な気持でこの偉人に対している。著者はリンカーンの礼讃者であり、リンカーンを現代の最大の英雄の一人に数えているけれども、リンカーンの短所や野人振りなどについてもありのままに語つている。

リンカーンを育くんだ辺境、リンカーンのたくましい創造精神、絶えざる自己練磨、まれにみる優れた性格の成長、大事件を処する才能、などについても数多くのエピソードをまじえて興味ぶかく記されているが、この本はイギリス人の読者のために書かれたものであるだけに、リンカーンという人物の背景となるアメリカの歴史を要領よく紹介している点に特色が見られる。植民地時代、独立戦争、1812年の戦争、ミズリー協定、などについて要約して語り、リンカーンの出現を待つ社会状勢をはつきりと把えることができる。また、リンカーンの青年時代にアメリカ国内で勢力を競つていた諸政党についても詳しい。

リンカーンとダグラスの有名な政論から、北部諸州と南部諸州の対立に至り、この巻の後半は南北戦争史である。この戦争に対するイギリス国内の反応を記した部分は興味ぶかい。著者は、その頃イギリスに他国を理解する力が不足していたこと、その判断にあたつては、自分の立場からしか見ることができなかつたことを悔いている。イギリスは、北部の主張に対して懐疑的であつた。ただ、イギリスの労働階級は北部を支持していた。個人としては、ダーウィンとテニスンは北部に声援を送つており、またディッケンズは奴隷制度そのものを否定して北部の主張を正しいと認めていたが、戦争という最悪の事態に突入すると、南北両側のどちらも支持しなかつたという。

南北戦争については著者は、リンカーンの戦略を広範囲にわたつて載せており、戦場で示された政治家としてのリンカーンの指導力の強さがよく描かれている。ここに描かれているリンカーンは魅力ある人間であると同時に、偉大な指導力を持つ政治家である。歴史の流れと社会の動きのなかに把えられたチャーンウッドのリンカーンは、現在なお新しいリンカーン像の一つである。（一般）

**Benjamin P. Thomas: ABRAHAM LINCOLN: A Biography**

ベンジャミン・トマス著　**エイブラハム・リンカーン伝**（仮題）

N.Y., Knopf. 1952. 549 pp. $5.57

偉人リンカーンが兇弾にたおれてから、来年でちようど90年になるが、彼にかんする本は冊子のように小さなものをいれると4,000種に上るといわれる。そのうち、リンカーン研究者から現在もその価値をみとめられているものが100種ほどあり、一巻ものではもつとも有名でかつ権威あるものとされていたのはチャーンウッド卿の著作である。1916年に出版されて以来、すくなくとも最近まではそれが一巻もののリンカーン伝では最高のものとされていた。

しかし、1952年にベンジャミン・トマスのこの本が出てからは、どうやらその王座はこちらの方にゆずられた感がある。550ページにちかい大冊ながら、著者の周到公正な筆は新しい事実をよく吟味集録して、冗漫にわたらず、独断にながれず、偉人のクローズ・アップを読者に提供している。しかもそのクローズ・アップは非常にするどい焦点の中にとらえられていて、これまでにない正確さで訴えてくる。“これは単に歴史的な偉人の伝記たるにとどまらず、その軽快な筆致によつて当代の代表的文学作品となるものであり、今後十年間はこれに匹敵するものは書かれないであろう。また叙述のたしかさは、著者がなが年この題材を掌中にしつかりとつかんで微細な点まで知悉していたことをしめすものである……”とクォータリー・レヴュー誌が評しているのも誇張ではないとおもわれる。

年々歳々偉人リンカーンにかんする研究はさかんであり、それにつれて資料もますます豊富になつてきている。1947年にはアメリカ国会図書館にロバート・トッド・リンカーン資料室ができた。ベンジャミン・トマスは、この著書の完成のためにその資料を縦横に渉りようしている。資料の豊富さに

おいてすでに 40 年前のチャーンウッド卿より優位に立つていたわけである。さらにトマスは、これまでの生涯をリンカーン研究にささげてきた人であり、また“リンカーン著作全集”の編集顧問でもある。一巻ものリンカーン伝の決定版と評しても、リンカーン研究家たちから異論の出ない著作であろう。

著者ベンジャミン・トマスは 1902 年生れ、ジョンズ・ホプキンズ大学出身で 1929 年に博士号を与えられた。伝記作家として有名である。

(一般、教養)　　　　――第15号、1954年5月――

## Ruth Painter Randell: LINCOLN'S SONS

ルース・ペインター・ランデル著　**リンカーンの息子たち**（仮題）

Boston, Mass., Little, Brown. 1955. 373 pp. $5.00

本書はエイブラハム・リンカーンの 4 人の息子を中心に、家族としてリンカーン一家を描いたものである。

リンカーンとメアリーの最初の子供は、1843年、イリノイのスプリングフィールドのみすぼらしい下宿家に生れた。ロバートと名ずけられたこの子は、性質が強く、わがままな所があつた。二番目のエドワードが生れて両親の愛を独占できなくなると、親の注意をひこうとして家を出たりした。

エドワードは 3 歳のとき、病気で死んだ。その年の暮に生れたウィリアムは、明るい、かわいげのある子供だつた。約 2 年後に生れたトマスは、幼児のとき頭が大きかつたので、タッド（おたまじやくし――タドポール）とよばれた。

リンカーンは夫人によれば「この世で一番親切な人、最も愛情深い夫であり、父親であつた」とともに、「子供たちを過度に甘やかした」のであつた。法律事務所から帰り道に知人と立話をしているリンカーンを、 3 人の子供が家に連れ帰ろうと、上衣の裾をひつぱつている光景を附近の人は幾度となく目にしたものである。

リンカーンはやがて大統領に選挙された。当時ハーヴァードに学んでいたローバートは、父の名によつて自分が注目をひくのを非常に嫌つた。

ホワイト・ハウスにおける一家の生活、南北戦争の推移、12 歳のウィリーの死、リンカーンとロバートとの感情的なわだかまりなどがくわしく述べられてゆく。リンカーンの暗殺をめぐる家族を描写した部分は、著者の暖

い筆致により、感銘深いものとなつている。

リンカーンの死後夫人のとつた行動、夫人の負債の支払いなど、ロバートは父の死後重荷を負わねばならなかつた。彼はシカゴで弁護士となり、やがて結婚した。

リンカーン夫人は 16 歳のタッドをつれてヨーロッパに渡つた。3 年後二人は帰国したが、間もなくタッドは肋膜でなくなつた。やがて彼女は精神に異常をきたし、ロバートは父の友人に母の精神鑑定を頼まねばならなくなつた。この痛ましい悲劇は最近手に入つた資料にもとずいてくわしく語られる。

1881年ロバートは陸軍長官に任命された。翌々年リンカーン夫人はスプリングフィールドでなくなり、その遺体はロバートにより夫と 3 人の息子の傍に葬られた。ロバートは後に実業界に入り、82 歳の高齢でなくなつた。

著者は前に **Mary Lincoln: Biography of a Marriage** を書き、本書はその続篇をなすものとみなしてよいであろう。巻末には 10 ページの参考文献目録、17 ページにおよぶ索引がついている。（一般）

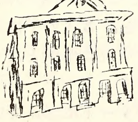
—— 第37号、1956 年4月 ——

## Jim Bishop: The Day Lincoln Was Shot

ジム・ビショップ著　**リンカーンが射たれた日**（仮題）

**N.Y., Harper. 1955. 304pp. $3.75**

アメリカにおける伝記中、最も数が多いと信じられているリンカーンの伝記の中でも、本書ほどに一刻一秒を追つているのは恐らくないと思われる。これはリンカーンが射たれた劇的な日の完全な記録である。1865 年 4 月 14



日午前 7 時に第一章が始まり、この時寝室を出たリンカーン大統領は、最後の章、すなわち翌日の午前 7 時には大勢の人に見守られ天国へ永遠の旅にたつていた。14日の朝、大統領は自分が死んでいる夢をみた。この夢が真実となつてしまつたわけである。とにかく 24 時間だけのことがらが 300 余ページにつまつているのであるから、本を手にとるまでもなく、そのくわしさを想像することは難かしくない。著者はこれだけの資料の蒐集について、序文でその方法を述べ、あらゆる公的私的なものを網羅したことを説明している。

最も興味をひくのはもちろんフォード劇場で行われた暗殺の場面である。時計の針が 10 時を少しまわつた頃、舞台は半分以上もまわつて第三幕第二場がはじまつていた。ジョン・ウイルキス・ブースを主犯とする暗殺計画者の薄暗い劇場内での動き。大口経のピストルがリンカーンの左耳をねらつた瞬間。“Oh! Doctor! Is he dead! Can he recover?” と最愛の夫の不幸に卒倒せんばかりのリンカーン夫人の様子。右往左往する人の群と騒音が入りみだれる当時の情況が詳細に綴られている。結局左耳から右の眼にかけて射込まれた弾丸が脳の中に止つていたため、致命傷となつてしまつた。主犯のブースは、しばらくして 10 時 45 分に、少しはなれた場所から馬で逃げようとしたとき逮捕されたのであつた。

伝説の形としては焦点を 24 時間にしぼつただけに、参考となるリンカーンについての知識を必要とするかも知れないが、ワシントン市のくわしい地図をはじめとして他の本にはみられぬ珍らしい人物の写真が集められており、非常に興味ぶかい。

著者は 25 年間にわたつて、この資料を集めたという。この本の内容はその努力にふさわしいものである。著者はデイリー・ニューズやデイリー・ミラーの記者をつとめ、後にキャソリック・ダイジェストの編集員となつた。著作にはこの他 **The Mark Hellinger Story; Parish Priest; The Girl in Poison Cottage** などがある。（一般）

## William F. Zornow: LINCOLN AND THE PARTY DIVIDED

ウイリアム・ゾーノフ著　**リンカーンと分裂した政党**（仮題）

Norman, Okla., Oklahoma University Press. 1954. 264 pp. $4.00

1864年、エイブラハム・リンカーンの人気は急速に後退しつつあつた。3年もの長い間戦われた血なまぐさい南北戦争は未だ何時終るとも知れぬ泥沼の様相をていしていた。戦費はかさみ、国内生活は、インフレの脅威にさらされていた。さらに大統領を支える為政者たちの間に現われた政策の対立は、ようやくリンカーン政権の基礎を大きくゆさぶるうよになつた。この秋にあたつて、大統領改選期を迎えたアメリカの職業的政治家の間には、リンカーンの代りに、南軍に対しより徹底的な打撃を与え得る人物を、そしてまたより強力な国内政権を実現し得る人物を次期大統領候補に指名しようとする動きが現われてきたのである。もし、リンカーンにしてこの時、大統領選

挙に敗退するようなことがあれば、アメリカの歴史は、混乱と敗北のうちについえ去つたかもしれなかつた。まさにアメリカ史上最大の危機の一つの到来ともいうことができよう。

ここで当時の政局をかえり見ると、そこに見られるのは、共和党を中心とする統一派と、民主党和平派との対立である。そして、この輿党たる統一派は、南軍の無条件降伏と黒人の完全な解放を主張する過激分子と、リンカーンのように、黒人の完全な解放にもまして国家の再統合を焦眉の急とする穏健分子、更に憲法のよう護と国家統合を望んで共和党と合体した民主党戦闘派との三つに分たれていた。これと対抗する民主党和平派は、戦争に反対し、一日も早く南北の講和を実現することをその政策としていた。

1864年、リンカーンは、高まりゆく社会不安の中で、以上のように対立した政党をまとめつつ、再選をめざし、孤り戦わねばならなかつたのである。このとき、リンカーンがいかに政党を操縦し、またいかなる幸運が彼を再選させ、そしてアメリカを永久分裂の運命から救つたのか、ゾーノフの手になる本書は、この間の事情を、始めてわれわれの前に明かにしてくれた。この本を読むものは、改めて、リンカーンの政治家としての敏腕と、彼がアメリカ史にしめる重要さとを認識することであろう。

本書において、著者はまず、統一派過激派のチェイス財務長官とリンカーンとの対立を説明する。この対立は、間もなく、クリーブランド党大会におけるリンカーンの勝利に帰した。この後ボルティモアで開かれた統一派大会は、ようやく次期大統領候補としてリンカーンを指名するにいたつたのである。

しかし、再選への道はさほど容易なものではなかつた。8月に始まる戦局の不利な進局は、一時、次期大統領の栄冠を、民主党候補マックレラン将軍におもむかしめるかと思わしめるものがあつた。この間にあつて、ダークホースたる第三党候補フリィーモントの努力もあなどりがたいものとなつてきた。けれども、9月以降、シャーマン、シェリダンそしてファラガット将軍たちの示した目ざましい活躍は、南軍を撃砕し、北軍の勝利を人びとの前に確証づけ、事態はリンカーンに有利に展開した。ここにおいて、政局は三度転換し、11月の選挙にのぞんだのである。この選挙で、リンカーンは、212票の得票を得て、ふたたび大統領の座につくことに成功した。しかし、これを一般投票の割合についてみるならば、僅かに全体の55パーセントを獲得することが出来たにすぎなかつたという。これは、いかにこの選挙が困

難なものであつたかを十分物語つてくれるものといえよう。

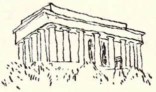
著者ゾーノフは、オハイオ州の出身であつて、現在、キャンザス州立大学歴史科で教鞭をとつている。本書は、今まで顧りみられることの少なかつた1864年のリンカーンに対し、鋭い解明の筆を進めたものであり、リンカーンの研究者にとつて新らしい分野を切り開いたものということができよう。

なおこの本には、24 ページにおよぶ詳細な参考文献目録が付されている。（教養）

## Maurine W. Redway & Dorothy K. Bracken:
## MARKS OF LINCOLN ON OUR LAND

モーリン・レッドウエイ<br>ドロシー・ブラックン 共著　**リンカーンの遺跡**（仮題）

N.Y., Hastings House. 1957. 121 pp. $3.75



リンカーン大統領の遺蹟をいながらにして訪れることのできるのがこの本である。向つて左側のページはほとんど写真で埋まつている。誕生地、ケンタッキーのシンキングスプリングに始まり、彼が暗殺されたワシントン市にあるフォード劇場（現在ではリンカーン博物館）にいたるまで、リンカーンの一生に深い関係のある場所、建物を非常に鮮明な写真で見ることができる。

全部の写真のうち、3分の1以上がリンカーンが幼少時代を過した各地に残る丸木小屋であることは、とりわけ強い感銘を与える。このように小さな粗末な掘立小屋を転々と移り住み、成長した少年が、後年、あの偉大な解放者となつたのであると考えるとき、ページを繰る手も弾むのを覚えるであろう。

ワシントン市の最も有名な場所の一つであるリンカーン記念堂にある椅子に深く腰かけた彼の像は、だれでも知つている彼の晩年の姿であるが、シカゴのリンカーン公園にある立像や、ダグラスとの立会演説の記念碑や、リンカーンとその母の壁彫刻など、目新しいものも多い。とくに、インディアナ州のリンカーン博物館の前に立つ、彼の少年時代の像は、慈悲深さをたたえている他の像に比べ、精気を全身にみなぎらしており、われわれに正義と希望の光を投げかけてくれる。

本文はたんなる写真の演説文だけにとどまつていない。非常によく調査のゆきとどいた簡潔な一篇の伝記である。小さい頃から水を運び、薪を集め

て働き続けた彼が、当時から読書が好きで、数少ない自分の家の本を読みあさり、特にバイブルなどほとんど暗記してしまう程であつたこと、だんだんに成長し法律に志ざすようになつたこと、遂にはホワイト・ハウスの住人となり、1865 年に劇的最期を遂げた有様まで目に浮んでくる。

著者のモーリン・レッドウェイはワシントン大学の大学院で、南北戦争の研究をした時に、リンカーンの遺跡のいくつかを調査して歩いた。共著者のドロシー・ブラックンも、旅行が好きでアメリカ全土を廻つているうちに、リンカーンの遺跡に心をひかれたものである。現在二人とも、ダラスのサザン・メソジスト大学で教鞭をとつており、この二人は以前にも、**Early Texas Homes** という本を合作している。

序文の中で両著者は、この本には三つの意図が含まれていると述べている。すなわち、第一に、リンカーンの遺跡や記念碑自体の手引となること、第二に、リンカーンの伝記として、彼の生涯のエッセンスを、よりすぐつて述べ伝えること、第三に、読者に、自分の眼でこの偉人の遺跡をたどつてみたい、という感情をおこす刺戟となること、である。著者たちのこうした意志はこの一巻のなかに完全に生かされている。（一般）

## Irving Stone LOVE IS ETERNAL

アーヴィング・ストーン著 **愛は永遠に**（仮題）

N.Y., Doubleday. 1954. 418 pp. $ 3.95

エイブラハム・リンカーンと夫人メアリー・トッドを描いた **Love Is Eternal** は本年 9 月 Literary Guild の特選書となつた。また、この作品は10月のなかばからベスト・セラーズ小説の部の第一位を占めている。著者アーヴィング・ストーンは **Lust for Life** 以来、今回の小説ほどの佳作を発表していない。



この野心作は 25 年にわたるリンカーンと夫人の波乱に富んだ生活を描いた作品であり、アメリカの最も誤解の多い結婚と称されるリンカーンの結婚を真実の姿に立返らせている。リンカーンの研究は盛んで深く掘り下げたものも多いが、これほどこの偉人を人間として扱つているものは他に見あたらない。そして、夫人メアリー・トッドは、これまで彼女を目立たなくしていたあまりにも有名なエイブラハムの投げる大きな影からも、また例外といえるまで多くの長所、短所をもつ

た女という誤つた印象からも脱け出して、鮮明な人格として再現されている。

リンカーンの求婚時代、結婚、その幸福に暗い影をなげる戦争、および死についてこの本は語る。リンカーンとメアリー・トッドの結婚は世間一般に信じられているようなものではなく、真の愛情から生れた結婚であつたのである。たがいに求めあい、喜びもまた悲しみもわかちあい、ついに祝福されるものとなつたこの二人の結婚生活が、興味あるかずかずのエピソードとともに語られる。

貧しい開拓者の息子として生れたリンカーンにとつて、伝統を重んじるレキシントン・トッド家の贅沢と礼儀に適応してゆくことは容易でなかつたにちがいない。リンカーンのユーモアは農民のものであり、彼の無頓着は悪評があつた。実行力に富む彼は一面ひどく逡巡するタイプでもあつた。そして、彼の気むずかしさといつたら誰も尋常では我慢出来る程度のものではなかつたといわれる。しかし、この偉大な人物が、彼女を人生の伴侶に求めたときはあまり魅力的でなかつたに違いないが、彼の内部にひそむ大きな価値を見抜いたのは彼女の永遠の誇りとすべきである。活発で誰からも愛されたメアリーは富裕な求婚者にとり囲まれていた。しかし、小柄で快活な彼女は、長身で憂うつな感じのする貧しい弁護士を夫に選び、彼らの性格や好みの相異を克服して未来を築く努力を惜しまなかつたのである。

メアリーは絹のドレスや宝石だけを楽しみにしていた当時の上流階級の少女の類型には入らない。彼女は読書を好み、機智に富んだ女性であつた。当時、政界で活躍していたヘンリー・クレイ、スティーヴン・ダグラスなどとも親しく語りあう進歩的な女性であつた。ともかく、彼女は勇気と決断力をもち、リンカーンに不屈の魂を吹込んだのである。彼女はその知性と勇気のすべてで、結婚後生じた多くの不運を切り抜けたのである。リンカーンがしばしば見せる思いやりのない行為、彼の憂うつ病、息子エドワードの死、彼女の父の死後の家族内の不和、夫の政治上の敗北、たえず起る感情的な争い、南北戦争、それにともなつて南部からは裏切者と見られ、北部からはスパイと見なされるという彼女自身のくるしい立場、息子ウィリアムの死、そして最後に勝利の瞬間における夫の暗殺、こうしたすべての不幸な出来ごとに耐えて烈しく生き抜いた一女性の姿を、ストーンは大きな同情と理解をもつて描き出している。

ストーンは南北戦争について広範囲にわたつて深く研究している。この大戦争の描写は力強く色彩にみちている。もちろん、一部の歴史家たちはあ

る点では意見を異にするかもしれないが、全体の効果から見れば取るに足りないことと思われる。またこの作品は、具体的な細部の描写のみでなく、それぞれの人物の心の動きも雰囲気の盛りあがりをもつて描かれている。ときどき、スタイルはセンチメンタルな調子にながれ、会話が時代錯誤に陥ることも認められるが、全体としてはこの **Love is Eternal** は血のかよつた作品であると同時に、手固い、しつかりした作品である。

なお、表題の "Love is Eternal" 文字はメアリー・トッドの結婚指輪に彫られていたものである。（一般）——第21号, 1954年12月——

## Stefan Lorant: LINCOLN, A Picture Story of His Life

スティファン・ローラント著　**リンカーン写真集**（仮題）

N.Y., Harper. 1957. 304pp. $ 7.50

たて33センチ、よこ24センチという大きな本に600葉の写真が満載されている豪華版である。1952年に初版が出版され、各界で非常に好評を得たのだが、これはその改訂版で100葉以上の写真がさらに加えられている。

リンカーンの生涯に関係のある、ありとあらゆる写真が網羅されている。普通の写真ばかりでなく、リンカーンの書いた手紙や宣言書から、当時のいろいろな雑誌や新聞にのつた政治漫画や戯画が写真版で複刻されて載せてあり、この立派な写真画報をさらに充実したものにしている。特に南北戦争を描写するものには力点が置かれ、戦場やキャムプの様子など圧観である。まず、リンカーンの父とトマスが、母ナンシー・ハンクスと取交した結婚証書に始まり、アラブハムの生れた丸木小屋、リンカーンの恋人メアリー・オウエンズの肖像と、彼女にあてた手紙、背が高くてやせていて、既製の靴では合わなかつた彼が、自分の足型をとつて、わざわざニューヨークの靴屋に注文したその足型や、この度新たに付け加えられた、彼の暗殺者の刑の執行の有様などは、この本でなくては見ることの出来ない、貴重な資料である。

著者のスティファン・ローラントは、ハンガリー人で、ヒットラーに反対するミューニッヒのある新聞の記者をしていたが、捕えられて強制収容所にいれられた。ある日、捕虜に本の配給があり、たまたま彼が手にしたものがリンカーンの演説集であつた。リンカーンの思想にすつかり感銘を受けたローラントは後日必ず自分自身でリンカーンの伝記をまとめようと決心したのであつた。自由の身になつた彼は英国に渡り、「自分はヒットラーの捕虜

だつた」という日記を出版し、これはベスト・セラーとなつて各国語に飜訳され、捕虜文学の最高峰と賞讃された。

1940年米国に渡つた著者は、年来の望みを果そうと実行に移つた。伝記とはいつても彼はさまざまな写真を通してリンカーンを再び人びとの眼前によみがえらせるのが目的であつた。資料を集めるためにアメリカ全土を調査して歩いた十年間の努力が実つて、ついにいままで誰も成し得なかつた写真によるリンカーン伝を完成したのである。目近に見るリンカーンの一生と南北戦争史、それがこの本であり、巻末には、時代別の写真の索引が添えてあり、参照するのに非常に役立つている。

この一巻の写真集を通して、われわれはリンカーンという一人の英雄についてより多くことを知るのみでなく、歴史を学ぶたのしさを味わうことができる。(一般)

## Regina Z. Kelly: LINCOLN AND DOUGLAS

レジナ・ケリー著　**リンカーンとダグラス**（仮題）

N. Y., Random House. 1954. 184 pp. $1.95

これは、政治家リンカーンがどのような過程を経て政敵ダグラスをおさえ、大統領に選ばれるに至つたかを青少年のために語る作品である。副題に「決断の年月」と示されているように、政治的立場から、この二人の大政治家の1854年から1861年までの動きをわかりやすく描いている。



「奴隷制度を許すか許さないかは、各州が各自で定めるべきである」というキャンザス・ネブラスカ議案を提出したのは、北部生れの、しかし南部びいきのスティーヴン・A・ダグラスであつた。

米国北部では、その頃すでに大分奴隷制度反対を唱えるものが増えて来ていた。とくにエマスン、ソロー、ウィティアー、ロングフェロウなど理想を抱くニュー・イングランドの詩人や文学者のなかには反対者が多く、詩や文に各人は平等であることを主張していた。しかしそれまではこれも単なる理想主義にすぎず、実際に政治にまで働きかけるものはいなかつた。反対の気持はあつても南部の州民が奴隷制度を支持している以上、これに逆らうことは自分の得票を少なくすることを意味し、上院議員も下院議員も、あえて

これを実行しようとはしなかつた。

しかし、このキャンザス・ネブラスカ議案が 1854 年に議会を通過して以来、その当時の二党、民主党とウィッグ党にあきたらなくなつた人びとは、結集して共和党を設立した。誕生当時は人数も少なく、力も弱かつたこの政党に、主旨に賛成するものがだんだんと増えていつた。こういう人びとの中には、非常に過激な思想を持つたものもあり、ジョン・ブラウンはそのグループの指揮者であつた。「神の意志」である、と信じた彼らは、奴隷制度賛成者を何度か攻撃し、ついに合衆国軍隊によつて捕えられ、断罪に処されたが、ブラウンは自分の行為を恥じることなく、従容と死についた。こうした事件はまた多くの人びとを廃止論に導びいた。

名もなく、財産もなく、風采も上らず、聖書とシェークスピアには精通していたが独学しか修めたことのないリンカーンが人の注目をひき出したのはちようどこの頃である。このリンカーンが、後に大統領に選ばれるようになつたのには、彼が他の元議員に較べて政治にたずさわつた年月も少く、したがつて政敵も少なかつたことも一役果している。

一度イリノイ選挙ではダグラスに敗れたリンカーンが、最後には感激的な勝利を得るところで話は終つており、やがて来る輝やかしい、万民平等、自由の暁の訪れを暗示している。

この本は、中学、高等学校の生徒むきに、単に二人の政治家のことだけでなく、「政治」をわかりやすく説き明かし、「選挙の方法」などにも説明を加えている。著者、レジナ・ケリー女史は、シカゴのオースチン・ハイ・スクールの社会科の先生で、他にも青少年むきの本を多数著している。（青少年）

## Benjamin Barondess: THREE LINCOLN MASTERPIECES

ベンジャミン・バロンデス著　**リンカーンの三大演説**（仮題）

Charleston, W.V., Education Foundation of West Virginia. 1954. 168pp. $3.00

本書はリンカーンの生涯における三つの優れた演説、すなわちクーパー・インスティテュート、ゲティスバーグ、および大統領再就任の式場においておこなつた演説を研究したものである。この三つの演説は、リンカーンが大統領立候補を決意したときから、再度大統領に就任するまでの期間になされたもので、リンカーンの生涯にとつても、アメリカの歴史にとつても、重

要な意義をもつものである。

リンカーンは1860年3月27日、ニューヨークのクーパー・ユニオン（労働者教育のため Peter Cooper により創立された施設）で演説をおこなつた。この時リンカーンを招待したのは、反シワードの共和党の一派であつた。この夕方、約1,500名の聴衆に向つてリンカーンがおこなつた演説は、三つの部分からなる。すなわち、ダグラス上院議員の奴隷制度に関する建国者の意図の解釈にこたえて、歴史的事実を述べ、ついで南部の人びとに訴え、最後に北部の共和党員を激励したものである。「正義は力を生むということをわれわれは信じよう。その信念において、われわれの理解するままに、最後までわれわれの義務をはたそう」という言葉で結ばれたこの演説は、聴衆を感激させ、リンカーンの名はアメリカ全土に知れわたり、彼は2カ月後には共和党の大統領候補に指名された。

1863年6月、南軍と北軍はゲティスバーグで激戦を交えた。その年の11月、この戦闘にたおれた兵士たちのために、同地に記念墓地がつくられた。リンカーンがこの墓地の式場でおこなつた演説は、短いが非常に印象ぶかいもので、有名な「人民の、人民による、人民のための政府がこの地上より消滅せざることを……」という言葉で終つている。

1865年リンカーンは大統領に再選され、3月4日ワシントンの国会議事堂の広場には、四万近い人びとが就任式を見に集まつた。この日の演説でリンカーンは、奴隷制度の罪が戦争をもたらしたことを激しい口調で語り、戦いの終つた今は、国の傷をいやし、戦死者や遺族をいたわり、永遠の平和を回復すべきことを述べた。

おのおのの演説について、当時の状勢、準備、会場の雰囲気、演説の態度、演説の内容、聴衆の反響、リンカーン自身の評価、新聞の論評がくわしく叙述されている。著者は一章をさいて、大統領の就任式の演説について、その起り、目的などを歴史的に論じている。附録として、クーパー・ユニオン、ゲティスバーグ、就任式の演説の全文がのせられている。

これら三つの演説の分析を通じて、われわれはその背後にあるリンカーンの偉大さを感じさせられるのである。

著者は有能な弁護士、歴史家で、ニューヨーク州裁判所に 35 年もかよつたという経歴を持ち、Civil War Round Table of New York; the Manuscript Society; Illinois State Historical Society などの会員ある。

（一般）——第34号、1956年1月——

## J. G. Randall: MR. LINCOLN

### J. G. ランダル著　**大統領リンカーン（仮題）**

N. Y., Dodd, Mead. 1957. 392 pp. $ 6.50

リンカーン伝はこれまで、伝記の多いといわれるアメリカでも、一番多く出版されたものであるが、この **Mr. Lincoln** は、従来見落されていたリンカーンの一面をとらえ、リンカーンに新しい解説を試みている点で異色ある伝記ということが出来よう。

だいいち、従来のリンカーン伝記作者として知られたニコレイやヘイそしてチャーンウッド、サンドバーグ、ベン・トマスなどが優れたものを遺しているにもかかわらず、大部分は 1860 年以前のリンカーン、すなわち大統領就任までの時代に重点を置いている。ところが、この **Mr. Lincoln** が力を入れているのはむしろ 1860 年以後であつて、リンカーンに関する知識を深めるために、また、アメリカ史編纂の上に偉大な貢献をしたことになる。

さらに、いままでに描かれたリンカーンはどちらかといえば、ロマンティックな雲につつまれたような、超人間的な印象をあたえるものばかりであつたが、ランダルはこういう傾向を見事に破り、史実に忠実にという方針のもとに書いている。政治家としてのリンカーンを歴代の大統領の中でも中庸をとる賢い人、政策の可能性を鋭く判断出来る力を持つた人として描いている。この点で、ランダルはリンカーンを、つくり話や迷信的な存在から救い出した恩人ということになろう。この本の批評をおこなつた評論家の一人は「歴史が多すぎて、人間リンカーンがすくなすぎる」と述べたほどだが、これはこの本の調子と内容を適確に衝いたものである。

最後の章 "God's Man" にランダルの死後（1955）、カレント教授（Richard N. Current）が他の数人と力をあわせて完成した部分で、リンカーンの聖書やシェークスピアへの傾倒、深い信仰など、精神面についての生活をとりあげている。その他、リンカーンの結婚、軍司令官としての業績、彼独特のユーモア、雄弁など、多方面にわたつて目新しい事実の数々もこの部分に収められている。

リンカーンについて学べば学ぶほど、われわれは彼の偉大さに驚異の目を見張る。ともかくも、これはこれまで一冊にまとめて出版された本の中では最もよいという折紙も何人かにつけられており、とくにカレントは「この本はリンカーンのレントゲン写真だ」という讃辞を捧げている。一般も専門家も面白味を感じる本である。（一般）——第51号、1957年6月——

## Arthur Bestor, David C. Mearns, & Jonathan Daniels: THREE PRESIDENTS AND THEIR BOOKS

アーサー・ベスター
ディヴィッド・マーンズ共著　**三人の大統領とその読書（仮題）**
ジョナサン・ダニエルズ

Urbana, Ill., University of Illinois Press. 1955. 129 pp. $2.50

読書は「たましいの糧」、「信念の父母」と言われている。アメリカの大統領のなかで、政治思想史の上で、とくに目立つて大きな存在であるトマス・ジェファソン、エイブラハム・リンカーン、フランクリン・ローズヴェルトは、どんな本をどのように愛読していたであろうか。本書は、この問題について考証している。



まず、ジェファソンとローズヴェルトである。この二人の読書傾向は異なる。ひろく知られているように、ジェファソンはヒューム、モンテスキューの著作のような思索的な本を好み、ローズヴェルトはマハンの著書のような現実的な本に注目した。だが、この二人は、ともに有名な蔵書家であつた。ジェファソンの蔵書は、今日の国会図書館の母体となつている。ローズヴェルトも蔵書家という点では、現今の出版物インフレーションを考慮に入れても、ジェファソンにおとらない。

ところが、リンカーンはこのような蔵書家ではない。彼は独立独歩の人で、正規の教育をほとんど受けていない。だから、彼はその知識を主として読書によつて得た。読書は彼の生涯において、きわめて重大な意義をもつ。そこで、リンカーンの伝記作家は、彼の読書についていろいろ書いている。神話に近いような話すら作り出している。

リンカーンの読書歴について、最も信頼のおけるものは、ロバート・トッド・リンカーン文献である。これはヘンリー・ハーンドンが収集したもので、1941年国有となつた。本書の著者マーンズは、国会図書館の資料課長で、この文献の管理者である。これに全面的に目を通し、幼時から晩年にいたる、リンカーンの読書歴を書きあげている。子供の頃イソップの「寓話」、「天路歴程」、「ロビンソン・クルーソー」などを愛読していたという話から、青年リンカーンが文法、数学、測量、法律、歴史、伝説、宗教、哲学、古典、小説、詩、新聞、政治などの各分野において、どのような書物を読んでいたかについて詳しく述べている。

リンカーンの読書生活については、その友人や近隣の人びとの証言がさまざま参照されているが、いずれも少しずつ食いちがい、決定的なことは言えないようである。ただ結論として、リンカーンは「多読の人ではなく、むしろ思索の人であつた」ということができるであろう。

この本は、イリノイ大学の図書館学部で主催されるローレンス・ウインザー教授記念講演を編集したもので、Books and the Mass Market につぎ、同学部の企画による叢書の第五巻として出版されたものである。(専門)

## もしリンカーンが今日生きていたら?

坂西志保

“もしリンカーンが今日生きていたら?”という課題は、魅力的であると同時に、何か人をじらせ、焦燥の苦しみを味わせるものである。というのは、この偉大な人物が生れてから150年、56歳で凶漢の手に倒れてから94年たつた今日、私たちは、彼の終生の戦いと死は決して無益でなかつた、とほこらかに報告したい。自由と人間の権利のために、彼ほど勇敢に戦つた人物はないといつてよいであろう。1セント銅貨に刻まれている彫りの深い思索的で厳しい顔と“自由”という文字を眺めて、この1世紀半の間に人類は、彼が高くかかげた遠大な理想に向つてどれだけ前進したかを考え、ひどい焦燥の感に襲われるのである。

アメリカの標語に“どこへ行くのかわからないが、前進していることだけは確かだ”というのがある。往来のはげしい道路には、草が生えない。坐るな、立ち止まるな、ただ進め、進めと、誰に命じられたのか、私たちは息を切らして走つて来た。しかし、リンカーンが生命をかけて護ろうとした理想は、どうなつたのであろうか。自由の敵は疲れもせず、衰えもせず、戦況は依然として険悪なのである。であるから、いまリンカーンに会うなら“たしかに前進しました。だが、どこへ行つたのか皆目わかりません”と報告しなくてはならない。

リンカーンが大統領候補に指名された時、選挙運動のために彼の伝記を編纂しなければならなかつた友人のスクリップスが訪ねて来た。貧困の中に

生い立つた天才的な少年という風に書きあげないと、宣伝にならない。彼の問に答えて、リンカーンは、トーマス・グレーの挽歌の1節を引用して“貧しき者の短い単調な年譜”といつている。ケンタッキー州の低地に生れた彼の最初の記憶は、山から突然襲つて来た豪雨が、折角蒔いた種子を、肥えた表土とともに洗い流してしまつたことであつた。父のトムが手製の鍬で耕やす後について、幼いリンカーンは、南瓜の種子を2粒ずつ落していつたのであつた。水はひいたが、狭い畑は岩や石ころでおおわれ、どうにもならない。家族は僅かの家財を背負つて、新しい土地を求めてこの谷間を脱出したのであつた。当時の彼の思い出は、狩野川台風後の伊豆地域を思わせるのである。貧しい人々の年譜は、今日でも続けられている。

社会の混乱という点から見ると、1850年代のアメリカと、今日の日本とはよく似ている。もちろん、問題の種類もスケールも違う。アメリカでは一方においては自由農業と提携して盛り上つて来た北部の工業があり、他方奴隷を使つて繁栄している南部の農園制度があつた。そして、これは、単に2つの相異つた生活形態であるだけではなく、その背後にある思想の相違にも基づくものであつた。従つて、早晩衝突する運命にあり、事実衝突したのである。リンカーンは“もし家分れ争わば、その家立つこと能わざるべし”という有名な演説で不和と派閥の争いに対して警告を発している。

もしリンカーンが現在の日本においての政界の争いを見るならば、同様の警告を発したであろう。合衆国の南北諸州の争いとくらべると、日本の保守と革新、あるいは保守党内の勢力争いなど、ものの数ではない。しかし、リンカーンはすでに20代で、イリノイ州の政界で鍛えられていた。州議員に立候補して、落選したのは彼が23歳の時であつた。2年後に再度立候補したが、今度は保守、革新両党の連立候補者であつたから、政策の声明もしなかつたし、選挙運動もしなかつた。郵便局の仕事と測量に出かけ、土木工事があると仲間に入つてツルハシをふるい、取入れ季節なので、村では麦刈の集団に加わつた。誰よりもいちばん早く仕事をやるので、リンカーンは、この人たちの票をみんな獲得した。そして、当選すると、友人から2百ドル借り、新しい身分にふさわしい服装をととのえた。政治の分野では“能力と創意と誠実が大きくものをいう”と、若いリンカーンは考えたのであつた。

議員としての仕事は道路を新設する、橋をかける、学校を建てるなどが主となり、議員は、州全体の住民の福祉より、自分の選挙区に対する責任だけを考えていた。そして、結局掛引きの上手な人が名を売り、ほんとうの政

治的才能をもつた人は浮き上つてしまう。これは現在でも改められないでいるが、潔癖なリンカーンにとつては耐えられなかつた。彼は友人に“私は意気が沮喪してしまつて正直なところ、ここにいるより世界の他のどんなところにでも逃げ出して行きたい”と書き送つている。

しかし、州立法庁でのリンカーンの経験はかけがえのないものであつた。陳情、説得、妥協、掛引きと、政治の技術を身につけた。しかし、彼が普通の政治家と違つた点は、このようなことが政治の全部でないということをよく心得えていた。彼は一年生議員として1つの悪を克服するために望ましくない手段方法を使うのは、2つの悪を育てあげ、それが鼠算式にふえて行くのをよく知つていた。政治生活の根本は党の統一で、これが勝利の第一条件だと考え“分裂している家は立ち行くことが出来ない”と説いた。彼は20年後にこの言葉を再び使つて連邦の分裂を食い止めようとしたのであつた。

リンカーンはこのような自分の政治的信念が、自分を苦しい羽目に追い込むのを嘆かずにはいられなかつた。“私は、自分を出し抜き、自分の恋人と結婚する友人の付添いをさせられる男のように、さんざんな目に遭わされる”ともいつている。彼は、党の調和のためにいさぎよく自分の野心をおさえ、いつも調停者の立場においていたが、いつまでも裏面にとどまつているつもりはなかつた。政界で鍛えられて行くにつれ、彼は忍耐と自制を身につけ、敵に対して誠実をもち、他人に機会を与えるとともに、自分に対して当然与えられるべきものと考えたことだけしか要求しなかつた。

若いリンカーンが僅かな政治の経験ではつきりと身につけたことを、世界の人類の多くはまだ自分のものにしていない。宇宙時代というのに、地上の政治は大して進歩していない。もちろん、国際政治の面では、国連によつて示される国際世論によつて平和機構が生まれた。これは、リンカーンがアメリカ合衆国の連邦政府に期待していた理想であつた。州権を十分に尊重しながらも、連邦は単なる共同体ではなく、永続的に断ちがたいきずなによつて結ばれているという信念であつた。もちろん、国際政治の底流には依然として権利政治の色彩はあるが、それでも、リンカーンが国連の総会にアメリカの主席代表として出席するならば、公共の原理と共通の土台の上に立つて、国際問題を処理しようとしているその努力は認めてくれると思う。

国際政治はある点まで前進したとすれば、リンカーンの国民の国民による国民のための政治という高い理想のもとに打建てられた新興民主主義国は、どうも及第しそうにも思われない。それは議会政治への信仰ともいつて

よいもので、どのような意見の相違があつても、国家と国民の利益については共通の考えをもち、国家と国民への奉仕を党利党略より優先的に考えるという態度なのである。これがなくては、議会政治は健全に運営出来ない。議会政治のルールを確立させたのはリンカーンであるといつても過言ではないと私は思う。

先に合衆国の南部と北部の生活形態の相違にちよつと触れたが、1788年に憲法が制定された時、州が連邦から分離脱退する権利があるかどうかについては論議されなかつた。南部にも、北部にも州は連邦に加入する権利も脱退する権利ももつていると考えた人が相当数いたことは事実である。リンカーンが大統領に就任した時、南部はすでに分離し、連合を組織していた。北部にも分離は当然と見なす人たちがいた。彼は分裂した国民の首として、不安定な地位にいるのによく気がついていた。リンカーンは、大統領として就任した自分は連邦と憲法を救うことで、南部の奴隷制に干渉することではないと考えた。そのため彼は形勢傍観主義者だとか、日和見主義者としてひどく非難された。これは興奮した人たちの誤解で、リンカーンが明かにしたことは、立憲主義の原則であつた。それを簡単にいうなら、政府は各州の奴隷制に干渉する権利も、計画も持つていない。州権はどこまでも侵害することなく維持したい。憲法は逃亡した奴隷を持主に返すことを規定している。この憲法上の誓約を連邦政府は強行する。しかし、憲法に明かにされていないことについては、多数の判断が受け入れられなければならない。そうでないと無政府主義に走つてしまうことになる。連邦脱退の中心思想は無政府主義のものである。憲法に基く制限に拘束され、意見と感情の変化に歩調を合わせて変化して行く多数者こそ、自由な人民の唯一の主権者なのである。これを受け入れないものは専制主義にゆかざるを得ない。従つて、少数者の支配は、民主主義の国では許すことが出来ない、とリンカーンはいうのである。彼は、静かに、しかし、厳然として立憲政治の精髄である合理的討議を要請したのである。"内乱という重大な問題は、諸君の手中にあるので、私の手中にあるのではない。政府を破壊すると諸君は天に誓約してはいないと思うが、私は政府は維持し保護するのを誓約する"と語つている。しかし、彼のこのような懇願は無視され、内乱は避けられないものとなつたのである。

この多数者の権威の認識はその後守られたであろうか。第二次大戦を引き起した非立憲的な、また高圧的な行動は、私が説明する必要はない。リンカーンは就任四年間、恐ろしい内乱に遭遇し、その間に憲法を無視し、独裁

政治をやる機会があり、またある時は内乱を鎮圧するため、憲法の拘束を放棄するようにすすめられたことが度々あつた。しかし、彼は頑強にそれを拒み、戦争と正常の統治とを同時に遂行した。それがどんなに困難で、議会と協力するのにどれほど苦労したか、リンカーンを研究した人だけが知つていることかも知れない。

ここでもまた私たちは恥かしくて、リンカーンに顔向け出来ないようなことを平和時にやつている。少数者の意見に耳を傾けることを忘れ、穏かに説得し合う態度を失つている。多数党は権力と数にものをいわせて、強引に自分たちの意志を通そうとする。少数党はあらゆることにソッポをむき、頭から否定的な態度をとり、実力行使に出ようとしている。これでは立憲政治は全く行きづまり、議会政治は運営出来ない。リンカーンがどこまでも共通の土台の上にたち、話し合い、激突を避けようとしたあの態度を、私たちは改めて学ばなければならない。

最後に私は、リンカーンほど自由を擁護するためにあらゆる受難を耐え忍んだ人はないといいたい。彼の閣僚たちでさえ陰謀を企てたり、彼の意志を無視して勝手なことをした。大統領の権限を無力化しようとしたり、彼の知性や人格を傷つけたりするのは、当時当り前のことのようになつていた。軍人にいたつてはもつとひどかつた。北軍の気勢が上らず、大統領が最後には作戦計画を自分で考え出さなければならないような羽目に追いやられたのであつた。そのような状勢下にあつて、リンカーンがとつた寛大な態度は、人間業を超越したものであつた。閣僚を追放することもせず、軍の司令官の更迭も考えず、相手の善意を信じ、どこまでも忍耐深く説得しようと努めた。ぐうたらの司令官に手を焼きながら、最も有能で、信頼出来るグラント将軍が戦果をあげてはいるが、ちよつとひまがあると酒びたりになつて困る、と文句をいうと“将軍の飲んでいる酒を少しもらつて来てくれないかね。他の将軍たちに飲ませたいんだ”と、リンカーンはいつた。

チャールス・ビアードは『共和国』と題する著書に“1861 年から 1865 年の間に、北部の新聞の紙面からとるだけでも、リンカーンに対する悪口、非難、また烈しい批判は 50 冊の大型の本になるほどたくさんある”といつている。しかも、あの悲壮な南北戦争の間、新聞の発行停止ということは、ほとんどなかつたのである。大統領に対する非難攻撃が士気を沮喪させ、戦局を至極不利にしたのをリンカーンはよく知つていた。言論や出版の自由に対し、彼はどこまでも寛大な態度をとり、大衆の良識を支持し、干渉するよ

うなことはなかつた。政府に対し自由に意見を披瀝する市民の権利を彼はそれほど重大視していたのである。同時に、また彼ほど個人的な感情を公の問題と完全に切り離していた人物はないといつてよいであろう。

私は先に、政治とは国家国民への奉仕を優先的に考えるのが、民主政治の原理だと述べた。これを最もよく現わしたリンカーンの態度は、戦時中に行われた大統領選挙についてである。彼は再選されないこともあり得ると予測して、もしそうなつたら11月3日の選挙の日から翌年3月4日まで“連邦を救うため、当選者と協力するのが自分の義務だと考える”と述べている。幸い彼は当選し、連邦を救うことが出来た。彼はまた“もし人民が熟慮の結果、国家と自由を失つてまでも即時の和平を得たいと決意するなら、それに反抗する権限も権利も自分はもつていない”といつている。

立憲政治と国民の自由を真剣に考える政治家はもちろん、個人も、今日改めてリンカーンを思い、彼から学ばなければならないのではなかろうか。

（了）

## 歴史的偉人としてのリンカーン

沢　田　謙

私の少年時代に“東西英雄番付”というのがあつた。豊太閤とナポレオンとか、日蓮とルーテルと、似かよつた東西の人物を取組ませて、論評するのである。

西郷隆盛には、ガリバルジが取組ませてあつた。私は変だなと思つた。

西郷は維新三傑の一人、ガリバルジはイタリー建国の三傑の一人であるが、二人は性格がまるでちがう。西郷はガリバルジのような単純な男ではなかつた。ガリバルジも純情愛すべき好漢にはちがいないが、西郷に見るごとき、茫洋たる偉大さをもつていない。

私は西郷に比すべき偉人を求めるなら、リンカーンをおいてないと思う。リンカーンならその人物の大きさといい、深さといい、大西郷にくらべて決して見劣りしない。

赤児のごとく純真で、しかも底にはかるべからざる機略を蔵し、時に尋常の規矩を逸しているようで、大局はつかんで放さず、山湖のごとく澄みきつていて、そこに謎のごとき神秘性があるところなど、西郷とリンカーンはまさに好一対である。

ふしぎなことに二人とも巨大漢であつた。

西郷は上野の銅像に見るごとく、堂々たる大兵肥満であつた。かつて江戸城明渡しの談判のことで、急に京都まで往復せねばならなかつたが、困つたのはあの巨軀をはこぶカゴだつた。やつと島津家のお抱え力士、横綱陣幕のカゴをかりて、まにあわせたという。いつか陣幕と体をくらべてみたら、身長、体重ともに似たものだつたが、肩幅と厚みに西郷がむしろすぐれていたと伝えられる。

リンカーンは、体重こそ西郷に劣つても、身長ははるかに西郷をしのぐ、1.95メートルの巨人だつた。痩せているように見えたのは、あまり長身だつたからで、肩幅などはガッシリと広く、それに無双の力持ちだつた。

生れたのは人の知るごとく、ケンタッキーの開拓地の荒地にポツンと立つた丸太小屋であつたが、森のなかで、屈強な男が三人いつしよに斧をふるつているような音がすると、

「おや、エイブがまた森にはいつたな」

と人びとがいうほどであつた。

面白いことに、リンカーンが政界に進出したのも、このものすごい腕力のおかげだつた。ニュー・セイラムという村の雑貨店の番頭になつてまもなく、近郷近在で"荒牛"と恐れられていた若者と、レスリングの試合をして、みごとに打ち倒した。これで一躍村の人気者になり、あいつは強い上に正直で学者だ。ひとつ州議会に出そうじやないかと、青年団の連中がかつぎ出したのが始めである。

リンカーンもその巨軀と腕力が自慢で、大統領になつてからも、すこし背の高い人に会うと、背くらべして打ち興じたものである。

だが対比すべきは、むろんそんな体軀のことではない。その生涯をかけた政治目標である。その点、二人は奇しくも規を一にした。が、これはのちに詳しくのべる。

リンカーンがイリノイ州議会議員になつたのは、25才の時だつた。それから彼は、測量技師をやつたり、郵便局長をやつたりしながら、独学で法律の勉強をはじめた。郵便局長といつても、彼自ら「その郵便局は僕の帽子のなかにあつた」といつているぐらいで、局員もない、配達夫もない。郵便局すらなかつた。週にいくどかとどく郵便物を、彼が帽子のなかに入れて、くばつて歩くという郵便局長であつた。

28才の時、彼は弁護士の資格をとり、州の首府スプリングフィールドに

出て開業した。当時彼の属するホィッグ党は少数党だつたが、いずれもそろつてのつぽだつたので、世はこれを長身9人組（Long Nine）とよんだ。リンカーンはその急先鋒として、まもなく民主党のダグラスと並んで、イリノイ州議会の双壁といわれるようになつた。

ダグラスもまた身を微賤より起した自助力行の偉才で、リンカーンより4才の年下であつたが、学校教師として糊口するかたわら法律を修めて弁護士になつた。そして州議会に議席をうるや、たちまち頭角をあらわした。

低身肥満のダグラスと、長軀痩身のリンカーンとは、まことによい対照であつた。生れながらの野人で、脱俗の風のあるリンカーンが“A. Lincoln”と白い系で印をつけた大きなコーモリ傘をぶらさげ、やせ馬にまたがつて、相変らず田舎の巡回裁判所めぐりをしている時、ダグラスは満々たる野心と、縦横往くとして可ならざるなき才腕とをもつて、まつしぐらに出世街道を突進していた。

当時スプリングフィールド第一の富豪といわれたエドワーズ邸に、先妻の娘でメアリー・トッドという女が帰つて来た。21才の才色兼備の婦人で、そのころ珍らしい大学出であつたが、とても気位が高く、将来大統領になるほどの男でなければ、絶対にとつがないといつていた。

ではメアリーの選ぶのは誰だろうか。誰しもダグラスに目をつけた。ところが意外にも、彼女の選んだのは、あののつぽで不器用なリンカーンだつた。ふしぎな女性の本能とでもいうべきか。

だがこれはメアリーのめがねちがいのように見えた。結婚してからも、リンカーンは相変らず牛のように愚直で、鈍重で、38才の時、やつと国会議員にはなつたが、中央ではちつとも認められず、わずか一期だけで、再出馬を断念せねばならなかつた。が、胞中に野心のかけらも持ち合せぬリンカーンは、平気なつらをして、相変らず田舎廻りの弁護士をやつていた。

この間にダグラスは、たゆまぬ力行とあくなき大望とによつて、着々と立身の梯子をのぼりつつあつた。年少にして国会議員にあげられたダグラスは、権門と結び、勢家に附して、自らも巨万の富をつんだ。そして多数の奴隷を所有する“南部紳士”の娘と結婚して、ワシントンに宏壮な邸をかまえ、今では民主党第一の実力者となつていた。

ところがここに奴隷問題が再燃した。

奴隷制度はアメリカの古い問題であるが、ミズリー州が合衆国に加入した時に、やつと南北の妥協が成立し、ミズリー州には奴隷制度を認めるかわ

りに、今後北緯36度30線より北には、奴隷制度を認めぬということで折れ合い、これで小康を保つていた。

ところが1854年に、ネブラスカ、キャンザスの二州の合衆国加入問題が起ると、かねて大統領への野心にもえていたダグラスが、自ら委員長であつた地位を利用して、強引にこの二州にも奴隷制度を許そうとした。二州は36度30線より北にあるにもかかわらず。

この横紙破りに、天下は騒然となつた。今まで田舎弁護士でくすぶつていたリンカーンも、久しい沈黙を破つて、立たざるをえなかつたのである。

運命はまことに皮肉である。メアリーとの結婚当時から、はやくも競争者として、同じ人生の走場に立たしめた運命は、今また国家の土台をゆすぶる大問題に当つた、この二人の宿敵を相合せしめたのである。

もし争う相手がダグラスでなかつたら、リンカーンなどという名は、州外にはおそらく知られずに終つただろう。ところがダグラスは民主党の事実上の首領であり、誰の目にも最も有力な大統領候補と認められていた。

このダグラスと、国会の上院議員選挙を争つて、リンカーンは破れた。が、あくまで正義を守つて屈せず、いかなる強敵にもひるむことなく立ち向う、この毅然たる姿が、世人に深い印象を与えた。

ダグラスはずんぐりの小男だつたので世はこれを“小さな巨人”(Little Giant)と呼んでいたが、リンカーンの出現を見ると、「これが本当の巨人だ」といつて喝采した。

このころになると、奴隷問題はすでに、国家の存立をゆすぶる、険呑な問題になつていた。しかもそれは、単に奴隷を許すかどうかという、単純な問題ではなかつた。それは複雑にして、しかも多面的なる問題であつた。

第一にこれは道徳上の問題であつた。自由と人権を建国の大義とするアメリカで、人間が人間を、牛馬のごとく売買し、ムチをふるつて使役するとは何事であるか。だがこれは大義名分である。奴隷問題は第二に、経済上の問題でもあつた。

気候が寒冷で地味のやせた北部では、白人自ら森林をひらき、原野をたがやして、始めから自作農として出発した。ところがゆたかな日光と沃野にめぐまれた南部では、最初から大地主として、牛馬に代るべき安価な労働力を必要とした。のちに北部は小中地主から工業と商業に移り、南部はタバコの耕作から棉花の栽培に変つたが、北方の工業が、ヨーロッパ移民の自由労働者を利とするのに対し、南方が奴隷労働を必要とすることは、昔と変らな

かつた。

第三にそれは文化上の問題であつた。由来北部に移住したのは平民的な新教徒が主であり、南部に根をはやしたのは貴族階級であつた。従つて、北部には日に日に工場がたち、資本主義文化が生れるようになつても、南部では依然、封建貴族の風が吹いていた。誇らかな南方紳士は、北方の町人どもを軽蔑し、北部の実業家は旧式な南方人を嘲笑した。結局それは新旧二文明の衝突であつた。

第四にそれは政治上の問題であつた。資本主義の発達につれて、北方には新移民がうしおのように流れこんだので、人口も1千9百万に激増したのに対し、保守的な南方の人口は8百万にとどまつた。ために国会の議席数も、南部はやつと3分の1を占めるにすぎず、それがこれまでアメリカの政治を牛耳つていた、南部政治家の焦燥のたねとなつた。

第五にそれは憲法上の問題であつた。元来アメリカが建国の際は、13の州がそれぞれ主権国家として独立したのであるが、いざ独立してみると、13州を一つにする政府がなくては、国の存立が危いというので、連邦制度をとることになつたのである。が合衆国はできても、主権は各州にあるか、連邦にあるかという問題は、依然としてのこつた。そこで各州に主権があると主張する南部は、もし中央政府が、どうしても奴隷制度を許さぬというなら、合衆国から脱退して、別に新共和国をつくるといい出したのである。

こうした混乱した背景をもつ南北の対立であつた。なまはんかなことで解決できるわけがない。

ことに1860年の大統領選挙が迫るにつれて、危機感はいよいよ深刻になつた。もし大統領選挙に敗れたら、南部諸州は合衆国から分離するという態度を、露骨にして来たからである。

いかにすべきか。国民は奇蹟を待つように、天を仰いで長大息した。これはよほど型破りな人物でなくては、時局は収拾できない。

このとき中西部の平原から、異様な風貌をもつ、リンカーンという野人が、確乎不抜の信念をもつて、予言者のように現われた。これが全米の想像力を刺戟した。

「そうだ、あの男ならやるかも知れない！」

もし時勢がこうした危局でなかつたら、リンカーンは到底、大統領候補などにあげられる人物ではなかつた。共和党にはスワードだとかチェーズだとか、すぐれた政治的経歴をもつ有力な大先輩がいた。リンカーンはたつた

一度国会に議席をもつたにすぎない。

むろん人物からいえば、リンカーンは古今まれに見る大器であつた。だが時勢がかかる大器を要求しないならば、自ら進んでしゃしゃり出るような男ではなかつた。

それは彼がダグラスと上院議員を争つた選挙戦の最中だつた。リンカーンが停車場で待つていると、急に夕立がふつて来た。二人は真暗な貨車のなかにかけこんだ。

この時リンカーンは 20 年前、ニュー・セイラムの雑貨屋で番頭をしていたころを思いだし、その当時最大な野心は、州議会に出ることだつたとかいう話をした。

「それから後わしも多少は大きくなつたさ。でも上院議員を争うなんて……これはみんな友人たちがやつたことですよ。わしの分にすぎたことです。ところが妻は、どうしても上院議員になつて、それから大統領にならねばならんというんですからね」

そして長い膝を抱いたまま、いかにも、おかしそうに声に出して笑うのだつた。

「考えてごらん、こんなまぬけが、大統領になるなんて！」

それが彼の本音だつた。彼を動かしているのは、明らかに野心ではなかつた。もし奴隷問題がこれほど嵐をふくんでいなかつたら、おそらく彼は一生を“中西部の風変りな弁護士”で終つたであろう。またそれで満足したであろう。

では奴隷問題に対するリンカーンの態度はどうだつたか。

1. 奴隷制度は、その現に存する州ではこれを許す。各州の自治権は、憲法の明らかに認めるところだから。

2. 奴隷制度は、現に存する州より外にこれを拡張することを許さぬ。人間平等の原則は、憲法のよつて立つ基盤であるから。

3. 各州が合衆国から分離する権利は、絶対に否認する。各州の結合は、憲法にふくまれた国是であるから。

このように、彼の信条は始めからはつきりしていた。それは“国家の統一”ということであつた。これはなんとしても守らねばならぬ。そのためには、奴隷制度については、彼は最大限の譲歩をおしまなかつた。

ここでふたたびわれわれは、大西郷を思い出さねばならぬ。西郷が命をかけて戦つたのは、いうまでもなく、幕府の封建政治を打ち倒して、新らし

い日本――統一日本をつくることであつた。その目的を達するために、彼はあらゆるものを犠牲にしておしまなかつた。天下を二分する戦争をすらも。

リンカーンの目標もまた、統一アメリカを建設することであつた。南北戦争を、奴隷解放の戦であるというのは、まちがいである。彼は国家統一の大目的をとげるためには、彼の大きらいな戦争を、4年有余にわたつてつづけて悔いなかつた。

さてこうしてリンカーンが、ついに宿敵ダグラスを破り、大統領に当選すると、時局は急転直下した。南部の一新聞は、リンカーン当選の記事を"外国電報"として取扱つた。ある地方では、雑誌店がリンカーンの肖像ののつている雑誌を売ることをこばんだ。

当選決定の4日後、南カロライナ選出の上院議員は、連袂辞職してワシントンを去つた。これを手始めに、南部の政治家や軍人が、ぞくぞくと引揚げを開始した。それに閣僚には南部出身者が多かつたので、ついでのことに、大蔵卿は国庫から巨額の金を引出して、南部の軍資金にあてた。陸軍卿は、兵器庫から銃弾薬をかすめ取つて、南部に輸送した。

大統領当選から、就任までの間には半ヵ年ある。やつとリンカーンがワシントンに出て来て、大統領の椅子について見ると、もう国庫も兵器庫もカラになつていた。夜の窓を開いて眺めると、海のように広く、ポトマック河が流れている。その対岸には、南部連邦の青い旗がひるがえつていた。その時南部7州はすでに合衆国から分離して、南部連邦という新共和国をつくつていた。そして要塞と軍費と兵隊とをもつて、待ちかまえていたのである。

こうしてついに南北戦争が始まつた。

戦局はいつも北軍に不利であつた。ことにブルランの一戦に敗北すると、敗兵は算を乱してワシントンになだれこみ、国都は一大混乱に陥つた。破れた軍服、血にしんだ帽、タンカにのせられた負傷兵――酒場はたちまち血まみれの軍帽の渦と化した。

いつ敵がポトマック河を渡つて、攻め寄せるかわからぬ。市民は逃げ仕度に狂奔し、閣僚は道を失つて、大統領に蒙塵をすすめた。

この恐怖と混乱のさなかにあつて、ただ一人落着き払つて動かぬのが、リンカーンだつた。周章狼狽する閣僚のなかで、彼は静かに机にむかい、前線の司令官を叱咤激励する電報をかいていた。

「ワシントンを救え！そして軍隊を救え！」

野人の強さがこの時はじめて現われたのである。

そうかと思うと、ある戦場で、2万の兵が戦死したという報がはいると、

「2万の生霊が、1日にして去つたのか！わしは辛抱できぬ！わしは辛抱できぬ！」

と、多恨のリンカーンは呼んで、一夜眠らず、一日中食事をしなかつた。

泰山くずるるとも微動だにしなかつた大西郷が、感激すると、僧月照と相抱いて入水したことなど、思い出されるではないか。

戦争が始まつていつしか2年たつた。が戦局は依然として振わなかつた。

そのうち形勢に重大な変化が生じた。始めは、国家の存立を保たなければ、奴隷問題は解決できない形勢であつた。ところが今は、奴隷問題を解決しなければ国家の存立が保てなくなつたのである。

大局を観るに敏なるリンカーンが、この機会を見のがすはずがなかつた。彼は若いころから熱心な奴隷解放主義者だつた。これまでそれを辛抱していたのは、統一国家をつくるという大目的のためだつたにすぎぬ。今その多年の願望をとげる日が来たのだ。

1862年9月22日、リンカーンはついに、奴隷解放の大宣言を発表した。そして翌年の元旦、その効力発生の日にいつた。

「わしは生涯において、この文書に署名するほど、正しいことをしているという確信にみちたことはない。わしの名がもしながく後世にのこることがあるとすれば、それはこの宣言書のためであろう」

事実、彼は今もなお“奴隷解放の父”として、世界に記憶されている。

それから後、南北戦争に最後の勝利をうるまでのリンカーンの苦心は、いまさら説くまでもあるまい。南北戦争に勝つたにしろ、勝たなかつたにしろ、リンカーンは歴史上の偉人である。今にいたるまで、これほど世界の人に愛せられ、敬せられている偉人はすくない。世界でいちばんよく読まれている本は、聖書についでは、リンカーン伝であるといわれる。なぜであるか。

ここで最後に西郷との対比で終りたい。

“敬天愛人”または“則天去私”といつて、好んで篇額などにその文字をしるしたのは西郷であつた。リンカーンの偉大さも、やはりそこにあつたと思う。

二人とも、いつまでたつても大きな赤ん坊のように、そこなわれぬ天真らんまんさをもつていた。なんのかざりもない、自然児そのままの姿で、私心というものを毛ほどももたなかつた。そうして純真けがれのない心で天を敬い、赤児のごとき心ですべての人を愛した。

西郷はまた「世の中に、地位も名誉も金もいらぬという男ほど、厄介なものはない」といつた。西郷もリンカーンも、そういう男だつた。

もとより西郷はどこまでも西郷であり、リンカーンはあくまでリンカーンである。二人のあいだは、厳としておかすべからざる個性がある。

しかし、もし西郷をして当時アメリカの大平原に生れしめ、キリスト教精神のなかに育てたならば、リンカーンのような人物になつたのではあるまいか。またリンカーンをして、幕末の日本に生れしめ、禅学をおさめしめたならば、大西郷のような人物ができたのではあるまいか。（了）

## 教科書にあらわれたリンカーン

### ――日米文化交渉史の一齣――

唐沢富太郎

### 序

日本の国民の戦前における国際的知識は、その国家主義的な教育の結果極めて狭く限られたものであり、且つ、偏したものであつた。日本と一番交渉の深かつたアメリカに関する知識も、ヨーロッパ諸国に比して粗雑であり、確固とした観念を持つていなかつたというのが実情であつた。この中にあつて、特にリンカーンは、明治以来、日本の国民に親しまれ、愛されて来た人物であつて、アメリカの偉人について質問された日本人は十中八九までが、リンカーンの名をあげるのが常であつた。これは、リンカーン自身が、真に偉大であつたことに由ることは勿論であるが、日本の国民にこれだけ親しまれたということには、国定教科書にとりあげられたという事実が大きな力となつている。すなわちリンカーンは、日本の明治37年（1904）以後使用された国定第1期教科書、大正7年（1918）以後使用された国定第3期教科書、昭和8年（1933）以後使用された国定第4期教科書（ただし高等小学校用教科書）と戦後の検定教科書にとりあげられているのである。しかしこの教科書にとりあげられたリンカーンの取扱い方は、戦前の国家主義的、軍国主義的な教育のために、故意に歪曲されていたり、リンカーンの真面目であるデモクラシーの精神を教えた点を隠しているなどの日本的な偏向があるのであり、教科書にあらわれたリンカーンを見ることによつて、逆に当時の日本の

教育の意図を理解することも出来るのである。つぎにその具体的な事実について若干考察して見よう。

（1）戦前の国定教科書にあらわれたリンカーン

リンカーンが国定教科書に現われたのは、国定第1期（明治37年以前使用）の修身教科書であり、当時の小学校8年間にあらわれた西洋人の中では、フランクリン（6課）に次いで5課にわたつてあらわれている。それは丸太小屋の「勉学」(高二、11, 12課）をはじめ、「正直」（高二、13課)「同情」（高二、14課）の徳目のほか、有名な南北戦争における黒人奴隷の解放を「人身の自由」の題目でもつて、次のように紹介している。

十五、人身の自由

その後、リンコルンは弁護士となり、また、国会議員に選挙せられ、黒人が奴隷としてつかはるることをあはれみ、つねに、黒人のために尽力したりき。そのころ、北部諸州にては、奴隷を解放すべしとの論、さかんになりしが、南部諸州は、かたく、これをこばみて、議論、二つに、わかれたり。リンコルンは、あまねく、諸州をめぐりて、熱心に、奴隷を解放すべしと説きたり。

やがて、リンコルンの人望、大いに加はり、西暦1860年に、大統領に選挙せられしが、南部諸州は合衆国より、わかれて独立せんとし、兵器、要塞等を占領せしより、南北戦争となり、5箇年間の長きにわたりて、つひに、北軍の勝利となれり。リンコルンは、この戦争中に、奴隷解放令を出して、400万の奴隷を、一時に解放せしかば、黒人はこれにおよばず、他の人々も、リンコルンの英断と恩徳とを称したり。すべて人身の自由を束縛し、人身を売買するがごときは、はなはだ、悪しきことなれば、何人に対しても、この心得を忘るべからず。（高二、23～24頁）

この国定第1期の修身教科書は、英人ピークにも称讃された程、近代的な内容を持つたものであつたが、ここでリンカーンが、「人身の自由」の教材として教えられたことは特に意義深いことである。というのは、近代化したといつても、極めて封建的な考え方が多く残つていた戦前の日本において、基本的人権について教えた教材は、この教材を除いて、その後、ついにあらわれなかつたからである。リンカーン自身は、その後も教科書にとりあげられたが、この「人身の自由」を教えた輝しい真面目は、国民には再び教えられなかつたのである。

国定第1期の修身教科書にとりあげられたリンカーンは、国定第2期の修身教科書（明治43年以後使用）になると、急に姿を消してしまつている。すなわち、1期においては、5課にわたつてとりあげられたにもかかわらず2期には全然とりあげられていないのである。このことは、外の西洋人についても同様の傾向を示しており、たとえば、フランクリンは、1期の7課から3課に減じワシントンは、1期の3課から1課に減少しているのである。このように、二期修身教科書にリンカーンがとりあげられなかつたのは、西洋人の人物の後退と関連するものであるが、この西洋人の教材を意識的に減少させた意図については、1期修身教科書から、2期修身教科書が成立して来る時代的背景を考慮しなければ理解出来ないのである。すなわち、1期修身教科書が使用され始めた頃（明治 37 年頃）より、日本の国家主義、軍国主義的傾向が漸次高まり、それが明治 37, 38 年の日露戦争を契機として、著しく高潮し、同時にこれに対する社会主義、平和主義的傾向の反発も激化する徴候を示した。そこで戊申詔書、幸徳秋水事件などに見られるような一連の反動政策が上からの権力によつて強行されることになるのであるが、このリンカーンの削除も、こうした反動的な明治政府の教育政策の現われとして理解されるのである。

家族国家倫理に基づき、忠君愛国を強調し、国民をひたすら政府の意図する臣民にまで育てようとした時代にあつては、「人身の自由」を説くような近代的精神の所有者であるリンカーンは歓迎されなかつたのである。そしてその代りに、二宮金次郎が改めてこの時期には、国定第1期の4課から7課に増大するに至つているのである。

やがて大正7年以前にあらわれた大正デモクラシー期の第3期の国定教科書について見ると、国語の教科書においてリンカーンが再び登場するようになつていることは注目すべき点である。第 11 巻, 22 課には「リンカーンの苦学として次のように紹介されている。

第二十二課　リンカーンの苦学

アメリカ合衆国第十六代の大統領リンカーンは、今から百年余り前、ケンタッキー州の片田舎の貧しい家に生れた。

リンカーンが7才の時、一家はインディアナ州に移つたが、さしあたり家がなくてはならぬので父は自分で木を切出して小さな家を造つた。それは三方が丸太の壁で、一方は明けはなしになつてゐて、戸も窓も床もないものであつた。家が出来てから次に土地を開きにかゝつた。

リンカーンは其の頃からもう父の手助をしなければならなかつた。父が木を伐れば自分は雑草をかり取る、父が畠を打てば自分は種をまくといふ風にかひがひしく働いてゐた。

一家の暮し向は誠にあはれなもので、食物なども自由には得られず、時には生のじやがいもしか食はれないこともあつた。かういふ有様であつたからリンカーンは 10 才頃までは本を読むことなどは殆ど出来なかつた。唯通りがかりの旅人から珍しい話を聞いては、僅かに心をなぐさめてゐた。

かうしてゐるうちに、知識を得たいといふ彼の欲望は益〻強くなり、父に対して是非学校に入れてもらひたいと願つたけれども、父は学校へ行つて時間をつぶすよりも畠に出て働いた方がよいといつて、なかなか許してくれなかつた。ところが母のとりなしで終に学校に入ることが出来たので、リンカーンの喜は一通りでなかつた。学校は四哩余りも離れてゐたが、路の遠いのは少しもいとはず、毎日毎日元気よく通学した。鉛筆や紙も自由には買へなかつたから、家で算術の練習をするには、木のシャベルと炭を用ひた。シャベルが数字で真黒になると、それをふいては又書く。大事なことは拾ひ集めた木片などに書止めて忘れないやうにしておく。かういふ心掛であつたから、成績は何時も優等であつた。

しかしせつかく始めた学校通ひも、家事のために僅か1年足らずで止めねばならなくなつた。それからは又父の手助をしたり、人にやとはれたりすることになつたが、本を読みたいといふ心は少しも変らなかつた。ところが家に書物がないばかりでなく、近くに図書館もないので、どうしても人から借りて読む外はなかつた。熱心なリンカーンは、書物を持つてゐる人の所には遠近を問はず借りに行つた。さうして其の本の内容がすつかりわかつてしまふまでは何度でも読む。かうしてイソップ物語やロビンソン・クルーソーや合衆国史等を読んだ。

或時近辺の人からワシントン伝を借りたことがある。リンカーンはかねがね此の偉人を非常にしたつてゐたので、鬼の首でも取つた気になつて一心に読続けた。昼の仕事の合間に読むのは勿論、夜は床に就いてから灯が尽きるまで読む。灯が尽きると翌朝すぐ手に取れるやうに、まくらもとの壁際に置く。ところが或夜、夜中に激しい雨が降つたことがある。リンカーンがふと目を覚した時はもう遅かつた。壁のすき間をもつた雨のために、本がすつかりぬれてゐたので、子供心にも大変心配し

て、其の夜はとうとう眠れなかつた。翌朝貸してくれた人の家に行つて事情を述べ、

「辨しやうすることが出来ませんから、其の代りに何か仕事をさせて下さい。」

と願つた。其の人は別にとがめもせず、願に任せて三日間畠の芋をとらせ、さうして本は其のまゝリンカーンにやつた。リンカーンは其の本をていねいに乾かして、其の後何度も何度も読返してゐるうちに、此の偉人の品性に深く感化された。

リンカーンは父の手助をして忠実に働くと共に、非常な熱心と努力とをもつて勉強を続けた。彼が他日大統領となり、世界の偉人として万人に仰がれるやうになつたのは実に此の少年時代の苦心のたまものである。

このように第3期の国定教科書においては、二課ではあるが、しかし相当長文の国語の教材として取上げられ、当時この教科書を使用した世代にも多大の影響を与えた。

しかし、大正デモクラシー期とは言え、すでに明治後期に高潮した国家主義的な思想は、深く時代の底流としてあつたから、国定第1期教科書のリンカーンのように「人身の自由」というような社会的なデモクラシーはついに教えられず、ただ「苦学」「誠実」という極めて個人主義的なもので終らざるを得なかつたのである。このこと自身、大正デモクラシーが、ついに社会的なデモクラシーに至らずに色褪せて行つた運命と相応ずるものであつて、大正期のデモクラシーの限界を如実に示しているものということが出来よう。

次に昭和8年以後にあらわれた国定4期教科書について見ると、既に昭和初期からの超国家主義、軍国主義思潮が強く教育内容に反映していた故もあつて、リンカーンについては、小学校6年間の教科書には取り扱われていない。ただ僅かに高等小学校の一年の修身教科書において、第21課「公正」第22課「寛容」にあらわれているのである。

ところが、これが昭和16年(1941)以後の国民学校時代になると、軍時教科書のような性格すら帯び始めていた国定5期教科書があらわれたが、そこではリンカーンは全然あらわれていないのである。そして、これはリンカーンのみならず、西洋人全体についても言えることで、僅かにベートーベェン(ドイツ)ガリレイ(イタリー)の二人を除いては、すべて姿を消して

いるのである。これは太平洋戦争勃発と共に、敵性国家の人物を排撃するという狭い国家主義にとらわれた教育政策のあらわれであり、これら西洋の近代精神を担つていた偉人の代りに、軍人が多く登場して皇国民の錬成、臣民教育が強力に進められて行つたのである。

以上は、戦前の教科書にあらわれたリンカーンの取り扱いであるが、要するに、リンカーンが、日本の教育の国家主義的軍国主義的傾向のために日本的に偏向されて教えられていたことが明らかに看取されるのである。

（2）戦後の検定教科書にあらわれたリンカーン

戦後の日本の教育は、デモクラシーを基調とするものになり、新しく創設された社会科では、この民主的人間の育成を目指すことを明示するようになつた。こうした民主主義教育の教材として、リンカーンは、どの検定教科書にも取り扱われている。たとえば、中学校用社会科検定教科書の 18 社発行の 18 冊（昭和 30 年度使用）をとつて検討して見ると、すべての教科書に必ず教えられているのが、このリンカーンであり、それはリンカーンの民主主義精神を伝える「人民の、人民による、人民のための政治」という言葉とともに教えられているのである。なお参考までにリンカーンにつづくものとしては、18 冊中、16 冊に登場している人物は、エンゲル（エンゲル係数として）、福沢諭吉、ルソーであり、15冊に登場しているのが、カントである。以下、アリストテレス（13 冊）ウィルソン（13 冊）ルーズベルト（12 冊）キリスト（12 冊）という順序であつて、これらを見ても、リンカーンが、いかに戦後の民主主義教育の理想的人間像として重視されているかが理解されるのである。さらに最近の道徳教育の復活に際しても、基本的人権や民主主義を理解させるために、リンカーンの伝記に取材した「黒人の父」と言つた教材も道徳副読本や、道徳教育用の教授資料書にとりあげられている。

このように、戦後のリンカーンの取扱いの特色は、戦前の教科書が、リンカーンの個人的徳目「誠実」「正直」「勤勉」などを主として説いたのに対して、リンカーンの真骨頂である人間愛（ヒューマニズム）と民主主義の精神という観点が主となつていることであろう。

以上が、日本の教科書にあらわれたリンカーンの取扱いの大略であるが、それは要するに、日本の民主主義的精神の盛衰と運命を共にしていたということが出来よう。

日本人にとつて、リンカーンが、アメリカ人のみならず、世界の偉人の中でも、とりわけ親しみ深いものであることについては、リンカーンの持つ

経歴と性格が日本人の国民性に適合するものを持つていたという点も見逃すことの出来ないところである。すなわち、第16代大統領リンカーンは、公明の人であり、神を敬した聖書的な人間のタイプに属する人物であつた。何人に対しても悪意もをたず、慈悲深く、その精神は高いヒューマニズムによつて貫かれていた。それ故にこそ奴隷解放という偉業を完遂し得たことは言うまでもないが、なお彼はまた丸太小屋から生れた信念を生涯抱いていた。アメリカの独立という大革命もこの庶民性に支えられたものであり、彼はこの精神をそのまま身につけたフロンティアの子であつたということが出来よう。そしてこれ等の精神主義、人間愛、庶民性、などが、日本人の国民性の中にも色濃く見出されるものであるが故に、多くの日本人から親しみと共感を得ることが出来たのである。これを日本人の愛好する人物と対比すれば、誠実さにおいて乃木大将のそれと、人間愛において親鸞、良寛らのそれと、庶民的英雄であるという点においては、豊臣秀吉のそれと、そして悲劇性という点においては、源義経、乃木大将らのそれと多分に相通ずるものを持つているということが出来よう。この意味において、リンカーンは、アメリカ人ではあるけれども、日本人にとつては、極めて身近かな人物として感じられているのであり、いわば、リンカーンが、日本人化して受けとられていると言つてもよいほどの親しみを持つているのであり、他の西洋人に比して、これほどまでに深く日本人の心に入つているものも他に存しないと言つても決して過言ではないと思うのである。(了)

## リンカーン文献目録

## WORKS BY LINCOLN

Lincoln, Abraham
**Abraham Lincoln's autobiography;** with an account of its origin and history and additional biographical material by Robert Dale Richardson
Beacon. 1947. 45 pp. $1.50

Lincoln, Abraham
**The collected works of Abraham Lincoln;** ed. by Roy Prentice Rastler and others
Rutgers University Rress. 1953. 9 vols. $115.00

**Lincoln, Abraham

**Life and writings**; ed. by Philip Van Doren Stern

Random. 1942. 863 pp. $ 3.75

Lincoln, Abraham

**The Lincoln papers; the story of the collection with selections to July 4, 1861**; by David C. Mearns

Doubleday. 1948. 2 vols. $ 10.00

**Lincoln, Abraham

**The living Lincoln**; The man, his mind, his times, and the war he fought, reconstructed from his own writings; ed. by Paul M. Angle and Earl Schenck Miers

Rutgers University Press. 1955. 673 pp. $ 7.50

*Lincoln, Abraham

**Selected writings and speeches of Abraham Lincoln**; ed. by Thomas Harry Williams

Hendricks. 1943. 290 pp. $ 2.00

*Lincoln, Abraham

**Speeches and letters, 1832–1865**; taken from the complete works of Abraham Lincoln, by Nicolay and Hay; ed. by Merwin Roe

Dutton. 1919. 237 pp. $ 1.85

## GENERAL BIOGRAPHY

*Agar, Herbert

**Abraham Lincoln**

Macmillan. 1952. 143 pp. $ 1.95

**Angle, Paul McClelland, ed.

**The Lincoln reader**

Rutgers. 1947. 564 pp. $ 3.75

Angle, Paul McClelland, ed.

**The Lincoln reader**

Pocket Books. 1955. 626 pp. 50 ¢

*Canby, Courtlandt, ed.

**Lincoln and the Civil War**

Dell. 1958. 416 pp. 50 ¢

*Charnwood, Godfrey Rathbone Benson

**Abraham Lincoln**

Pocket Books. 1952. 501 pp. 35 ¢

**Daugherty, James Henry

**Abraham Lincoln**

Viking. 1943. 216 pp. $ 4.00

*Herndon, William Henry and Weik, Jesse William

**Herndon's life of Lincoln;** the history and personal recollections of Abraham Lincoln; ed. by Paul M. Angle

World. 1949. 511 pp. $ 1.65

**Lorant, Stefan

**The life of Abraham Lincoln;** a short illustrated biography

New American Library. 1955. 256 pp. 50 ¢

**Lorant, Stefan

**Lincoln; a picture story of his life**

Harper. 1957. 304 pp. $ 7.50

*Ludwig, Emil

**Abraham Lincoln; the full life story of our martyred President;** tr. by Eden and Cedar Paul

Liveright. 1949. 505 pp. $ 3.50

**Randall, James Oarfield

**Lincoln; the President**

Dodd. 1945–55. vols. 1–2, $ 7.50; vols. 3–4, $ 7.50 each

*Randall, James Garfield

**Mr. Lincoln**

Dodd. 1957. 392 pp. $ 6.50

*Sandburg, Carl

**Abraham Lincoln; the prairie years and the war years**

Harcourt. 1954. 762 pp. $ 7.50

*Sandburg, Carl

**Abraham Lincoln; the prairie years;** with illus. from photos. and many cartoons, sketches, map, and letters; abridged edition

Harcourt. 1929. 604 pp. $ 4.95

**Sandburg, Carl

**Abe Lincoln grows up;** reprinted from his "Abraham Lincoln; the prairie years"

Harcourt. 1928. 222 pp. $ 3.25

*Thomas, Benjamin Platt

**Abraham Lincoln; a biography**

Knopf. 1952. 548 pp. $ 5.75

*Wheare, Kenneth Clinton

**Abraham Lincoln and the United States**

Macmillan. 1949. 386 pp. $ 2.50

## BACKGROUND

*Barondess, Benjamin

**Three Lincoln masterpieces**; Cooper Institute speech, Gettysburg address, Second inaugural

Education Foundation of West Virginia. 1954. 156 pp. $ 3.00

**Battles and leaders of the Civil War**; being for the most part contributions by Union and Confederate Officers; ed. by Robert Underwood Johnson and Clarence Clough Buel

Yoseloff. 1956. 4 vols. $ 30.00

**Battles and leaders of the Civil War**; being for the most part contributions by Union and Confederate Officers; selections, ed. by Neb G. Bradford

Appleton. 1956. 626 pp. $ 8.95

*Catton, Bruce

**This hallowed ground**; the story of the Union side of the Civil War

Doubleday. 1956. 437 pp. $ 5.95

Case, Salmon Portland

**Inside Lincoln's cabinet**; ed. by David Herdert Donald

Longmans. 1954. 342 pp. $ 6.50

* **The Civil War**

Grosset. 1956. 2 vols. $ 10.00

vol. 1. The American Illiad. as told by those who lived it; by Otto Eisenschiml and Ralph Newman.

vol. 2. The picture chronicles of the events, leaders, and battle-fields of the war: by Ralph G. Newman and E. B. Long.

*Donald, David Herbert, ed.

**Divided we fought**; a pictorial history of the war, 1861–1865; ed. by Hirst D. Milhollen and others

Macmillan. 1952. 452 pp. $ 10.00

*Donald, David Herbert

**Lincoln reconsidered**: essays of the Civil War era

Knopf. 1956. 200 pp. $ 3.50

Hesseltine, William Best

**Lincoln and war governors**

Knopf. 1948. 405 pp. $ 5.75

Kelly, Regina Zimmerman

**Lincoln and Douglas; the years of decision**

Random. 1954. 184 pp. $ 1.95

Kimmel, Stanley Preston

**Mr. Lincoln's Washington**

Coward. 1957. 224 pp. $ 7.50

Lincoln, Abraham

**Created equal?** the complete Lincoln–Douglas debates of 1858; ed. by Paul M. Angle

University of Chicago Press. 1958. 421 pp. $ 7.50

Lincoln, Abraham and Douglas, Stephen Arnold

**The Illinois political campaign of 1858;** a facsimile of the printer's copy of his debates with Senator Stephen Arnold Douglas, as edited and prepared for press by Abraham Lincoln

The Library of Congress. 1958. 212 pp. $ 10.00

*Meredith, Roy

**Mr. Lincoln's contemporaries;** an album of portraits by Mathew B. Brady

Scribner. 1951. 233 pp. $ 6.00

Nevins, Allan

**The emergence of Lincoln**

Scribner. 1950. 2 vols. $ 15.00

*Nevins, Allan

**The statesmanship of the Civil Wai**

Macmillan. 1953. 82 pp. $ 2.25

Pratt, Fletcher

**Stanton; Lincoln's Secretary of War**

Norton. 1953. 520pp. $5.95

Stoddard, William Osborn

**Lincoln's third Secretary; his memoirs**

Exposition. 1955. 235pp. $3.50

## SPECIAL STUDIES

*Bishop, James Alonzo

**The day Lincoln was shot**

Harper. 1955. 305pp. $3.95

Bishop, James Alonzo

**The day Lincoln was shot**

Bantam. 1956. 305pp. 50 ¢

Bruce, Robert V.
**Lincoln and the tools of war**
Bobbs. 1956. 368.pp $5.00

Liar John
**Songs Lincoln loved**
Duell. 1954. 85pp. $3.75

*Mitgang, Herbert, ed.
**Lincoln as they saw him**
Rinehart. 1956. 519pp. $6.00

Randall, James Garfield
**Lincoln and the south**
Louisiana State University Press. 1946. 161pp. $1.50

*Randall, Ruth Painter
**The courtship of Mr. Lincoln**
Little. 1957. 219pp. $3.75

*Randall, Ruth Painter
**Lincoln's sons**
Little. 1956. 373pp. $5.00

*Randall, Ruth Painter
**Mary Lincoln; biography of a marriage**
Little. 1953. 555pp. $5.75

**Redway, Maurine Whorton and Bracken, Dorothy Kendall
**Marks of Lincoln on our land**
Hastings. 1957. 117pp. $3.75

Sandburg, Carl
**Lincoln collector**; the story of Oliver R. Barrett's great private collection
Harcourt. 1950. 344pp. $7.50

Thomas, Benjamin Platt
**Lincoln's New Salem**
Knopf. 1954. 2nd ed. 166pp. $3.00

* **Three presidents and their books**; the reading of Jefferson, by Arthur Bestor; Lincoln, by David C. Mearns; Franklin D. Roosevelt, by Jonathan Daniels
Univ. of Illinois. 1955. 129pp. $2.50

Townsend, William Henri
**Lincoln and the Bluegrass; slavery and the Civil War in Kentucky**
Univ. of Kentucky. 1955. 342pp. $6.50

Whitney, Henri Clay
**Life on the Circuit with Lincoln**
Caxton. 1940. 530pp. $5.00

Wilson, Rufus Rockwell, ed.
**Lincoln among his friends**
Caxton. 1942. 506pp. $5.00

Wilson, Rufus Rockwell
**Lincoln in caricature**
Horizon. 1953. 327pp. $6.50

*Zornow, William Frank
**Lincoln and the party divided**
Univ. of Oklahoma. 1954. 264pp. $4.00

## FICTION AND DRAMA

*Andrews, Mary Raymond Shipman
**The perfect tribute**
Scribner. 1906. 47pp. $1.50

Drinkwater, John
**Abraham Lincoln; a play**
Houghton. 1927. 130pp. $1.56

*Sherwood, Robert Emmett
**Abe Lincoln in Illinois; a play in twelve scenes**
Scribner. 1939. 250pp. $3.00

*Stone, Irving
**Love is eternal**
Doubleday. 1954. 468pp. $3.95

## BOOKS FOR CHILDREN AND YOUNG PEOPLE

**Aulaire, Ingri Mortenson d' and Aulaire, Edgar Parin d'
**Abraham Lincoln**
Doubleday. 1939. 55pp. $5.00

Baker, Nina Brown
**The story of Abraham Lincoln**
Grosset. 1952. 176pp. $1.50

*Cavanah, Frances
**They knew Abe Lincoln**
Rand. 1952. 255pp. $2.50

Eifert, Virginia Louise Snider

**The buffalo trace**
Dodd. 1955. 193pp. $3.00

*Eifert, Virginia Louise Snider
**Out of the wilderness; young Abe Lincoln grows up**
Dodd. 1956. 214pp. $3.00

Eifert, Virginia Louise Snider
**Three rivers south**
Dodd. 1953. 176pp. $2.95

Eifert, Virginia Louise Snider
**With a task before me; Abraham Lincoln leaves Springfield**
Dodd. 1958. 217pp. $3.00

**Foster Genevieve Stump
**Abraham Lincoln; an initial biography**
Scribner. 1950. 111pp. $2.50

**Foster, Genevieve Stump
**Abraham Lincoln's world**
Scribner. 1944. 347pp. $4.50

**Judson, Clara Ingram
**Abraham Lincoln; friend of the people;** il. by Robert Frankenberg
Wilcox. 1950. 206pp. $3.50

*Koral, Bella
**Abraham Lincoln;** ed. by Josette Frank
Random. 1952. unpaged. $1.00

LeSuer, Meridel
**The river road; a story of Abraham Lincoln**
Knopf. 1954. 175pp. $2.75

McNeer, May Y.
**America's Abraham Lincoln;** il. by Lynd Ward
Houghton. 1957. 119pp. $3.50

Neyhart, Louise Albright
**Henry's Lincoln**
Holiday. 1958. 49pp. $2.50

*Nolan, Jeannette Covert
**Abraham Lincoln**
Messner. 1953. 183pp. $2.95

**North, Sterling
**Abe Lincoln; log cabin to White House;** il. by Lee Ames
Random. 1956. 184pp. $1.95

**印の本は全国各地のアメリカ文化センターにあります。
*印の本はどの本も全国各地のアメリカ文化センターまたは日米文化センターで相互貸借によつて借りることができます。

## 日本で出版されたリンカーン書

松村介石著　「阿伯倫古竜伝」
丸善商社書店　1890.（明治 23）

民友社編　「リンコルン」
民友社　1896.（明治 29）

畔上賢造著　「リンコーン言行録」
内外出版協会　1905.（明治 38）

ジョーゼフ・H・テヨート著　内外出版協会訳　「リンコルンの人物及其事業」
内外出版協会　1907.（明治 40）

内外出版協会編　「リンコルン一代記」
内外出版協会　1909.（明治 42）

桜井彦一郎著　「リンコーン物語」
丁未出版社　1912.（大正 1）

実業之日本社編　「人道の偉人・リンコーン伝」
実業之日本社　1914.（大正 3）

内ヶ崎作三郎著　「アブラハム・リンコルン」
実業之日本社　1919.（大正 8）

小松緑著　「世界三傑，成功秘伝」
博文館　1928.（昭和 3）

ジョンソン著　高木八尺訳　「米国三偉人の生涯と其史的背景」
有斐閣　1928.（昭和 3）

秋山弥一著　「偉人リンカーン」
教文館　1933.（昭和 8）

辻田右在男著　「アブラハム・リンカーンの人と言葉」
京都・和敬書店　1946.（昭和 21）98 pp.

辻田右在男著　「リンカン」
京都・大雅堂　1947.（昭和 22）362 pp.

リンカーン著　高木八尺・斎藤光共訳　「リンカーン演説集」
新月社　1949.（昭和 24）206 pp.

沢田謙著　「リンカーン」
潮文閣　1950.（昭和 25）

前田河広一郎著　「リンカーン」
社会教育協会　1950.（昭和 25）124 pp.

Ⓙ深沢正策著　「リンカーン自叙伝」
万里閣　1952.（昭和 26）404 pp.

ルードウィッヒ著　高橋敏樹訳　「嵐の中の人間像」
緑園書房　1954.（昭和 29）214 pp.

島影盟・丸山義二・恒屋清蔵共著　「偉大な人間の歩み」
泰文堂　1954.（昭和 29）257 pp.

Ⓙ池田宣政著　「リンカーン」
ポプラ社　1954.（昭和 29）380 pp. ¥180

Ⓙ坂西志保著　「リンカーン」（少年少女伝記文庫）
金子書房　1955.（昭和 30）221 pp. ¥250

Ⓙ沢田謙著　「リンカーン」（偉人物語文庫）
偕成社　1955.（昭和 30）290 pp. ¥170

大畠一男著　「民主主義をきづくもの：リンカーンの生涯」
法政大学出版局　1956.（昭和 31）315 pp. ¥290

Ⓙ松岡洋子著　「リンカーン」（世界伝記全集）
講談社　1956.（昭和 31）214 pp. ¥200

坂西志保訳　「リンカーン伝」上・下
時事通信社　1956.（昭和 31）上 341 pp. ¥350，下 364 pp. ¥350

リンカーン著　高木八尺・斎藤光共訳　「リンカーン演説集」
岩波書店（岩波文庫）1957.（昭和 32）¥80

小原敬士・本田創造共訳　「リンカーン：その生涯と思想」
岩波書店　1957.（昭和 32）300 pp. ¥130

Ⓙ尾山大助著　「リンカーン物語」
集英社　1957.（昭和 32）103 pp. ¥100

Ⓙ吉野源三郎著　「エブ・リンカーン」
岩波書店　1958.（昭和 33）356 pp. ¥240

Ⓙ印は青少年向き読物

Our reliance is in the love of liberty which God has planted in our bosoms. Our defense is in the preservation of the spirit which prizes liberty as the heritage of all men, in all lands, everywhere.

—*Abraham Lincoln*—

東京都港区赤坂葵町二

米国大使館文化交換局書籍課発行

図書印刷株式会社印刷